

「あついで胸さわぎ」 (作／横山拓也)

〈登場人物〉

武藤千夏	……	18歳／女性	芸術大学の文芸学科	
武藤昭子	……	45歳／女性	マスモリ繊維株式会社社員	千夏の母
川柳光輝	……	18歳／男性	芸術大学の舞台芸術学科	
花内透子	……	30歳／女性	マスモリ繊維株式会社社員	
木村基晴	……	48歳／男性	マスモリ繊維株式会社社員	

4月上旬。夜10時半頃。

大阪府郊外、繊維工場が立ち並ぶ町の外れの集合住宅（マンション）。その一室、武藤家。

キッチンで食器を洗う音。

バイト帰りの武藤千夏がいる。

母・昭子がキッチンから現れ、

昭子 帰ったんやったらただいま言いなさい。びっくりするやんか。  
千夏 ただいま。

昭子 こんな時間までバイト？

千夏 一人ドタキャンして来んかってん。

昭子 明日入学式やで。

千夏 それ言うて帰らしてもらったんやんか。

昭子 もう、心配するやんか。ゴハンは？

千夏 なんがあるん。

昭子 なんもないよ。

千夏 ほんならなんで聞くん。

昭子 食べてきてないん？

千夏 わからん。

昭子 わからんて何。

千夏 あれが昼ご飯やったんか夜ご飯やったんか、私にはわからん。

昭子 何時に食べたん。何食べたん。

千夏 5時に。パン。

昭子 5時にパン。それはおやつや。

千夏 疲れた。

昭子 お腹空いてんちやうん。

千夏 なんがあるん？

昭子 なんもないけど。

千夏 なんなんさつきから。

昭子 せやけど、もう10時半やで。太るで。10時過ぎたらなんも食べ

へん方がええつて。

千夏 は？ なんもないんやろ？

昭子 なんもないけど。

千夏 いや、なんもないことないやろ。

昭子 そらなんもないことはないけど、

千夏 パンとかあるやろ。

昭子 パンはない。あんたパン食べたんやろ。

千夏 続けて食べてもええやんか。でもパンないんやろ。

昭子 ないよ。

千夏 ほんなら何があるん。

昭子 なんもないよ。

千夏 なんもないことはないって言うたやん。冷蔵庫なんかしら入ってるんちゃうん。

昭子 (思いつくものから言う) マーガリンと、味噌と、マヨネーズと、わさびと、

千夏 なんもないやん。

昭子 なんもない言うてるやん。

千夏 そんなことある？

昭子 食べられるもんはだいたいお母さん食べたんやんか。

千夏 どういうこと。

昭子 今日残業やったし。残りもんでええわ思つて。ついでに冷蔵庫掃除したる思つて。

千夏 なんで今日やるん。そんな思い立ったみたいに。

昭子 そしたらいつやるんよ。

千夏 明日以降にしたらええやんか。

昭子 明日以降っていつやるんよ。

千夏 知らんし。

昭子 千夏がやってくれるわけちゃうやろ？

千夏 なんで私がせなあかんの。

昭子 あんたの家やんか。

千夏 お母さんの家やんか。

昭子 お母さんと千夏の家やんか。もう大学生になんねんからちゃんとしい。

千夏 なんなん急に、説教モード。

昭子 普通のこと言うただけやろ。部屋も散らかしたままやで。お母さん掃除せえへんで。

千夏 ええって別に。

昭子 明日の準備とかできてるんかいな。着ていく服とか。

千夏 大丈夫やから。

昭子 明日何時からなん。入学式。

千夏 9時。

昭子 何時に出るん。

千夏 9時。

昭子 なんでえ。

千夏 ウソ。7時半。

昭子 こうちゃんと一緒に行くん？

千夏 は？ なんでえ。

昭子 一緒に行ったらええやん。せつかく同じ大学入ったんやから。  
千夏 学科違うし。

昭子 学科違ってても入学式は同じ場所やろ。

千夏 そうやけど。関係ないし。

昭子 関係ないってなに。幼馴染やないの。安心やんか、一緒に行けたら。  
千夏 迷惑かかるって。

昭子 迷惑って。何を水臭いこと言うてるんよ。おんなじマンション住んでんのに。朝ピンポン押したらええやん。

千夏 小学生ちゃうねんから。

昭子 小学生のときは学校一緒に行ってたやろ。

千夏 1年生のときだけやろ。

昭子 明日から1年生やんか。大学1年生。

千夏 うるさいわあ。

昭子 うるさいってなに。なんもうるさいこと言うてへんし。

千夏 それがうるさいから。

昭子 ホンマ、あんたはいつまで反抗期みたいな返しするん。

千夏、逃げるように、

千夏 ちよつとコンビニ行ってくる。

昭子 こんな時間から。明日早いんやからやめとき。

千夏 お腹空いたの。

昭子 10時過ぎたら食べん方がええって。太るで。

千夏 明日のパンも買うてくるし。

昭子 もう。一番安いのんにしいや。コンビニで買うんやったら。

千夏 (手を出して) お金。

昭子 立て替えといて。

千夏 返してや。

昭子 レシートもらってきてや。もらって来なお金払わんで。

千夏 わかったって。

昭子 もうお母さん寝るで。鍵して行ってや。

千夏、返事もせず出て行く。(退場)

昭子 気いつけや。立ち読みしてたらアカンで。

もういない千夏に声をかける。そして、時間を気にして、

昭子 もうこんな時間やんか。ア カンアカン。

(昭子、退場)

【 2 】

夏。6月下旬、朝7時30分頃。  
マンションの共用部分。

川柳光輝が靴紐を結んでいる。

そこに、千夏が現れる。光輝に気づき、一瞬たじろぐが、平然を装って、

千夏 おはよ。

光輝 おお。千夏や。

千夏 千夏やけど。

光輝 久しぶりやん。

千夏 うん。

光輝 おんなじ大学やのに、全然会わへん。

千夏 入学式も会わなかったし。

光輝 入学式で。もう既に遠い過去。

千夏 ホンマ。もう夏や。

光輝 千夏の「夏」やん。

千夏 うん。今日1限から？

光輝 演技実習。

千夏 舞台芸術学科。

光輝 千夏は文芸やっけ。

千夏 うん。

光輝 千夏が芸大行くって思わなかったわ。

千夏 なんでよ。

光輝 なんでやる。そういう感じやなかったし、中学のとき。

千夏 そうかな。

光輝 うん。あ、そうや。来月、芝居あんねん。

と、光輝はカバンから演劇のチラシを一枚取り出して千夏に渡す。

千夏 おお。

光輝 夏休み中やし。時間あったら。

千夏 ホンマに役者やねんな。

光輝 修行中やけど。

千夏 なんかすごい。

光輝 千夏かって小説家、目指すんちゃうん。

千夏 目指すとか、そんなん。

光輝　なんでそこ謙遜するん。「目指す」くらいバンバン言うてかんと。  
芸大生やねんし。

千夏　ホンマやね。

光輝　言霊つてもんがあんねんで。

千夏、演劇のチラシを見て、タイトルを読む。

千夏　「フォルスタッフは汗をかく」

光輝　うん。

千夏　フォルスタッフって、シエキスピアの？

光輝　かな。わからんけど。

千夏　「ヘンリー四世」に出てくる道化。

光輝　そうなんや。でも、全然難しくないし。コメディやから。

千夏　うん。(チラシを)折ってもいい？

光輝　うん。

千夏、チラシを折ってカバンに仕舞いながら、

千夏　お母さんの会社の人でな、面白い小説とか漫画とか、めっちゃ持つてる人おつてな、トコちゃんっていうねんけど、いつも貸してもらってんねんやん。

光輝　そうなんや。

千夏　うん。シエキスピアも全部持つてる言うてたから、「ヘンリー四世」借りとくわ。面白かったら、

千夏、光輝のことをどう呼んでいいかわからず、指をさす。

千夏　貸してあげるわ。

光輝　おお。て、又貸し。

千夏　あ、そっか。

光輝、時計を見て、

光輝　あ、バス、時間。やばい。

千夏　ああ。

光輝　走るで。

千夏　あ、先行って、私忘れもんした。

光輝　はあ？

千夏　ごめん。

光輝 ええ。そしたら行くで、先。  
千夏 行って行って。  
光輝 遅れんで。  
千夏 大丈夫。  
光輝 じゃ。  
千夏 うん。

光輝、バス停へ向かう(退場)。  
千夏、光輝を目で追う。  
出勤する昭子が現れて、

昭子 何してんの。  
千夏 びっくりした。  
昭子 あんた、バス大丈夫なん。  
千夏 忘れもんしてん。  
昭子 何を。  
千夏 いや、忘れもんしたと思ったけど、してへんかった。  
昭子 何言うてんの。  
千夏 何言うてんねやろ。  
昭子 今こうちゃんと喋ってへんかった？  
千夏 うん。  
昭子 一緒に行ったらええのに。  
千夏 だから、忘れもんしたと思ったけど、してへんかってんやんか。  
昭子 なんやのそれ。  
千夏 なあ。  
昭子 何。  
千夏 私、こうちゃんのこと、なんて呼んでたっけ？  
昭子 こうちゃん言うてるやんか。  
千夏 そうやねんけど、中学のとき、なんて呼んでたかなって。  
昭子 そら「こうちゃん」やろ。  
千夏 そうやったかなあ。  
昭子 何を朝から呑気なこと言うてんの。  
千夏 高校別々やったから、なんか気恥ずかしいねん。  
昭子 まあそういうもんなんちゃう。こうちゃん男前なったしな。  
千夏 ……そうかな。  
昭子 役者目指してねやろ。  
千夏 うん。  
昭子 仲良うしときや。昔みたいに。  
千夏 あ、今度やる芝居のチラシ

もらったで。

昭子 そうなんや。て、また帰ったら聞くわ。お母さんも遅れる。あんたも遅れんで。

千夏 あ、なあ、トコちゃんにシェイクスピアの「ヘンリー四世」持つてるか聞いたいて。

昭子 わかった。

その即答に、

千夏 絶対わかってへんやん。

昭子 電話したらええやんか。

千夏 そうやねんけど。

昭子 もうお母さん行くで。あんたも気をつけて行きや。

千夏 お母さんもチャリ気をつけや。

昭子 はいはい。

と、昭子、マンションの自転車置き場の方へ。(退場)

千夏、昭子を見送ってからバス停の方へ。(退場)



同日。14時頃。

昭子の職場、マスモリ繊維株式会社の休憩スペース(屋外)。  
花内透子が出て、パンを小さくちぎって食べている。  
そこに昭子がやってきて。

昭子 おつかれ。暑いのに外で。

透子 あ、お疲れ様です。

昭子 休憩？

透子 うん。今やつとお昼。アッコさんはもう済んだんですか？

昭子 何が。

透子 いや昼ごはん。

昭子 当たり前やんか。何言うてんの。

透子 「当たり前」の意味がわかりません。

昭子、笑ってから、

昭子 トコちゃんいつもパンやな。

透子 パン好きやから。

昭子 千夏もパンばかり食べてるわ。

透子 千夏ちゃんと美味しいパン屋さん情報、共有してるんで。

昭子 パンお腹いっぱいになる？

透子 それなりに。

昭子 最近の小洒落たパン高くない？

透子 小洒落たやつは、まあ。でも、お店で定食とか食べるよりは安いし。

昭子 やけど、お腹いっぱいになる？

透子 「お腹いっぱい」にはこだわってないから。

昭子 えなんで。

透子 眠くなるじゃないですか。

昭子 お腹いっぱい食べて眠くなるのが一番の幸せやんか。

透子 アッコさんはそうやろうけど。

昭子 ちよつとそれどういう意味で言うてるんよ。

透子 自分で言うたんですよ。

昭子 自分で言うた。

と、笑う。

昭子 あ、なんか、千夏がな、なんか、トコちゃん、なんかの本、持っているか聞いたって言うてたわ。

透子 一切わかんないです。本しかわかんないです。なんですか？ なの本ですか？

昭子 わからん。カタカナのやつ。有名なやつやと思うけど。私でも聞いたことあるような。

透子 もうちよっとヒントください。

昭子 外国のん。

透子 広い。

昭子 まあまた電話かかってくる思うわ。

透子 いたずらに謎をふっかけんといってくださいよ。めっちゃ気になる。

昭子 言うときけど、あの子が芸大なんか行ったん、トコちゃんのせいやからね。

透子 「せい」って何ですか。

昭子 入学金130万やってんで？

透子 おお。

昭子 ジジババの生命保険で都度都度なんとかクリアしてきたけど、いよいよキツイわ。ここのお給金だけでは無理や。

透子 お給金。

昭子 普通に就職してくれたらええのに。トコちゃんに影響されて。

透子 本貸したりしてあげただけやし。元々そういう才能があったんですって、千夏ちゃん。

昭子 どこがよ。あの子が小説なんか書けるわけないやんか。

透子 芸大受かったときは喜んでたのに。

昭子 お金という現実がやってきて、喜びを飲み込んでいったわ。

透子、笑って、

透子 文学的表現。アッコさんの遺伝やん、千夏ちゃん。

昭子 アホなこと。

透子 でも、東京の大学行くとかじゃなくて良かったじゃないですか。もっとお金掛かってましたよ。仕送りとか。

昭子 東京で。東京なんか絶対行かさへんし。

昭子、急に声のトーンを落として、

昭子 なあ、今日付けで来た、新しい係長。

透子 え？ 木村さん？

昭子 東京の人。

透子 千葉って聞きましたけど。

昭子 一緒やんか。

透子 一緒ちやうでしよ。

昭子 私、大阪離れたことないやんか？ 東京って聞いただけでゾワワってなんねん。

透子 ふーん。まあ千葉やけど。

昭子 千葉も東京も一緒やん。

透子 乱暴。

昭子 繋がってるし。千葉と東京。

透子 そんなん言うたら埼玉も神奈川も繋がってるやん。

昭子 だからその辺は全部東京やん。

透子 無茶苦茶言う。

昭子 ちやうねん。東京弁がアカンねん私。

透子 東京弁。

昭子、木村の声真似をして（あえて気取った感じにして）、

昭子 「武藤さん、納品書のファイルの置き場所教えといてもろてもええですか」やつて。

透子 完全に大阪弁やん。「教えといてもろてもええですか」。

昭子 ちやうやんか。今みたいな感じのを、東京弁で喋るんやんか。

透子 それやったらなんでわざわざモノマネみたいに言うん。

昭子 みんな気持ちワルないんかな。

透子 東京の言葉が気持ち悪いとか言う人いませんて。

昭子 ええ、私がおかしいん？

透子 はい。

昭子 「はい」て。

透子 みんなテレビ普通に見てるでしよ。大阪ローカルだけ見てるわけちやうでしよ。

昭子 そうやけど。

透子 ていうか、持ち場戻った方がよくないです？

昭子 ちやうねん。ちよつと試してんねん。

透子 何。

昭子 サボってる縫い子への、木村さんの対応。

透子 何を女子高生みたいなことしてるんですか。

昭子 女子高生？ 私が？ どこが？

透子 いやアッコさんは全然女子高生ちやうけど。

昭子 いや待って。いけるやる私。女子高生。見てこの肌の張り。

透子 むくみでしよ。

昭子 むくみちやうわ。太ってるだけや。

透子 そこちやうから。私の言い たいとこ、そこちやうから。話奪

わんという。

昭子 何よ。何が女子高生みたいなんよ。

透子 だから、なんか教育実習で来てる先生にちよっかい出して困らせる、  
みたいな感じのやつ。

昭子 なにそれ。なんでそんなことするん。

透子 今のアッコさんやったらわかるでしょ。

昭子 いや何言うてるか全然わからへん。

透子 なんですよ。

そこに木村が登場する。

木村 武藤さん。

昭子 わ。木村さん。

木村 探しましたよ。

昭子 すみません。ちよつとパトロールしてました。

木村 パトロール？

透子 ただサボってただけですこの人。

昭子 ちよつとトコちゃん。

透子、木村に頭を下げる。

木村 あ、どうも。今日から、マスモリ繊維でお世話になります。布帛  
(ふはく)の係長の木村です。

透子 ニットの方で縫い子してる花内です。

木村 よろしくお願いします。

昭子 わからんことあったらこの子になんでも聞いたらよろしわ。

透子 なんで私。

木村 武藤さん。持ち場戻ってください。

昭子 いや、ちやうんですよ。トイレ行こう思ったら、なんか、迷ったん  
ですよ。

木村 迷う？ どうして。武藤さん、ここ長いんですよね？

透子 冗談言ってるんですこの人。

木村 え？ ああ。はは。

昭子 なんなんそのお愛想笑い。

木村 すみません。

透子 アッコさん。「係長」。(「この人、係長ですから」の意)

木村 サンコーアパレルさんからパターン指示書届いたんで。ちよつと見  
てもらえませんか。

昭子 ええ？ 私？

木村 みんな、武藤さんしか見れない（見られない）って言ってます。  
昭子 しやーないなあ。

透子 偉そうに。（木村に）ホンマすみません。

木村 面白いんですね、武藤さんて。

昭子 褒めても無駄ですよ。

木村 別に褒めてないですよ。

昭子 大阪では「面白い」は褒め言葉。

木村 おお。

昭子 何が「おお」やの。

透子 だから「係長」やから。

木村 はは。

昭子 その笑い方やめえって。

木村 気をつけます。

透子 おかしいおかしい。このやりとりおかしいですから。

木村、封筒を見せて、

木村 あ、そうだ。このタイミングでアレですけど、なんか、サンコーア  
。パレルさんからサーカスのチケットもらいました。5枚も。

昭子 ああ、いっつもこの時期くれるんですよ。誰も行ったことないけど。

と、笑う。

木村 これ、

昭子 タイムカードの横の「なんでもボックス」に入れといたらよろしわ。  
欲しい人持つて行くから。誰もいらんやろうけど。

木村 いや、なんか、社長が、武藤さん誘って行ってきたらどうかって。

昭子 はあ？

木村 いや、社長が。

昭子 何を言うてんの社長。からかって。

木村 いや、この歳で一人で大阪来て、右も左もわからないだろうからっ  
て、武藤さんだったら、いろいろ教えてくれるからって。

透子 あれ、木村さん独身？

木村 ええ。

透子 わあ、ええやんか。

昭子 何がええの。

透子 デートデート。

木村 いやいや。そういうのもアレだし、（透子にも）良かったら一緒に。  
5枚あるし。

透子 え、私？

木村 みんなで行ったら、なんか楽しいでしょうし。

昭子 私をダシにして、トコちゃん誘うつもりやったんやん。

木村 何を言ってるんですか、違いますよ。

昭子 ついでやから聞いていいですか。

木村 はあ。

昭子 こんな変な時期に、なんでわざわざ東京からマスモリなんか来はつ

たん。

透子 千葉。

木村 まあ、色々あります。

昭子 色々って。コレ？（小指を立てて）

透子 こら。

昭子 もう朝から木村さんの話題で持ちきりやねんから。

木村 また追々。

昭子 怪しいわあ。

木村 はは。

透子 まあ、近々、歓迎会とかあるんじゃないですか。そこで話してもらった

らしいじゃないですか。

昭子 ホンマや。歓迎会。社長なんか言うてませんでした？

木村 いや。

昭子 アカンやん。そこはやつとかんと。

木村 いや、違うんです。遠慮したんですよ。

昭子 なんです。

木村 秋冬モノの本生産はじまって、工場バタバタしてるし。

昭子 ええ、そんな関係ないやん。

木村 ほんと、僕が大人数苦手です。お酒も飲めないし。

昭子 そうなん。

木村 だから、気心知れたメンバーでサーカスが嬉しいです。あ、すみま

せん、気心知れたなんて。

昭子は、木村に懐に入られてしまい、気を許して、サーカスの話に乗っかることにした。

昭子 どうするトコちゃん。

透子 え？

昭子 サークラス。

透子 ホンマに私も？

木村 ぜひ。

昭子 車出してよ。

透子 言うと思った。  
木村 運転されるんですか。  
昭子 この子、実家やから車あるんです。  
透子 親の車です。  
木村 じゃあ悪いですよ。  
昭子 大丈夫。いっつもなんかあつたら出してもらってるし。  
透子 そうやって便利使いする。  
木村 電車で行けないんですか？

と、チケットに地図が載っていないか見る。  
透子も覗き込んで、

透子 うーん、確かに車の方が行きやすいかも。  
木村 そうですか。  
透子 日にち、いつですか。  
木村 来週の日曜です。  
透子 仕方ない。運転手やりますよ。  
昭子 よし、決まり。あ、それやったら千夏も連れていこか。トコちゃんに会いたい言うてたし。

木村 娘さん。  
昭子 あ、トコちゃん、彼氏も呼びいや。  
透子 はあ？ もうとつくに別れてるし。  
昭子 え嘘。早ない？ え嘘。  
透子 ホンマ。  
昭子 遊ばれてたん？  
透子 なんでよ。

木村 あの、仕事中なんで、その辺で。  
昭子 いや、この子、3月から付き合いだしたばかりやねんで。ネットで知り合った子と。  
透子 ちよっと、言わんといってくださいよ。別にネットで知り合ったわけちゃうし。

昭子 え、なんで？ なんで別れたん。  
透子 色々あんの。  
昭子 その彼と結婚すんのかと思ってたのに。  
透子 ないないない。  
木村 その話はまた、サーカスのときに。  
透子 なんでサーカスで私の別れ話せなアカンのよ。アカンのですか。  
木村 すみません。

昭子 木村さんの話も聞きますか らね。

木村 なんですか、僕の話って。  
昭子 (小指を立てて) コレやん。  
木村 ちよつとやめてくださいよ。

透子、油を売り過ぎているのを自覚して、

透子 アカン、もう戻らんと。  
昭子 ええ。

木村 「ええ」じゃないですよ。みんな待ってますから。  
昭子 何を。

木村 武藤さんしか見れないんでしょ、パターン指示書。  
昭子 もう、しゃーないな。ほんなら行つたるわ。

透子 悪ノリし過ぎやから。友達ちやうんですから。

昭子 もう友達みたいなもんやんか。

木村 はは。

昭子 お愛想笑い。

木村 あ、すみません。

昭子 はい、ちやつちやか行く。

木村 あ、はい。

透子 「係長」やから！

昭子と木村、布帛工場へ。(退場)



同日。夕方。

透子がいる。会社から駅へ向かう路上。(千夏に)電話をかける。  
千夏が電話に出る。

千夏 トコちゃん？

透子 久しぶり。

千夏 わあ、めっちゃ嬉しい。

透子 何が。

千夏 トコちゃんの声聞きたかってん。

透子 かわいいこと言う。そしたら、会う？

千夏 マジで？ 今日？

透子 うん。今どこ？

千夏 家帰ってるよ。あ、でも、夜バイト。

透子 じゃあ、バイトの時間まで。

千夏 いいんですか？

透子 駅来れる？ 駅のパン屋。

千夏 いけます。

合流。

駅前にて。

千夏 トコちゃんやあ。

透子 何よそれ。

千夏 会いたかったあ。

透子 久しぶりやね。大学生なったんかあ。

千夏、自分が高校生の時とは着ている服が違うことを意識する。

千夏 おかげさまで。

透子 もう慣れた？

千夏 はい。言うてるうちに夏休みやし。

透子 芸大生か。憧れるわ。

千夏 私も入る前は憧れてたけど、入ってみたらそうでもなかったです。

透子 なんよそれ。現役生の優越感ってやつ？

千夏 そんなんちゃうし。

笑い合う。

透子 あ、本。

千夏 あ、お母さんから聞きました？

透子 全然わからなかったけど。「カタカナのやつ。外国のやつ。有名なやつ」って。

千夏 クイズ王でも答えられへん。

透子 ホンマやで。

千夏、光輝の演劇のチラシを出しながら、

千夏 フォルスタッフ。

透子 フォルスタッフ？ え、なんやったつけそれ。あ、ちよつと待って。シェイクスピア？

千夏 そう。「ヘンリー四世」。

透子 調べる。

と、スマホを開きながら、

透子 道化の名前ちやうかった？

千夏 そうです。

スマホで検索をかけて、

透子 「ヘンリー四世」もそうやけど、「ウインザーの陽気な女房たち」もや。フォルスタッフ。

千夏 それ読んだことない。

透子 あ、そうか、フォルスタッフって、シェイクスピアの作品、いくつか登場するんや。

千夏 そうなんや。

演劇チラシを指して、

透子 それなに？

千夏 友達が出る芝居のチラシ。

透子 おお、さすが芸大。

千夏、チラシを見せる。

透子 「フォルスタッフは汗をかく」。

千夏 観る前に予習しときたくて。

透子 わかった、探しとく。多分あると思うし。  
千夏 ありがとうございます。  
透子 でも、芸大の図書館やったらシェイクスピアなんか全部揃ってるん  
ちやう？

千夏 そうやけど。トコちゃんに会う口実？

透子 そんな、いつでも会えるやん。

千夏 いつでもは会われへんやん。

透子 結構暇やで。今彼氏おらんし。

千夏 そうなん。春くらいに付き合った人、別れたん？

透子 とつく。千夏ちゃんは？ 芸大、誰かい人おらんの？

千夏 全然ですよ。バイト先もおっちゃんおばちゃんばっかりやし。

透子 恋愛せな。小説家なるんやったら。

千夏 そういふもんですか？

透子 そらそうやん。

千夏 トコちゃんみたいに次々いけたらええねんけど。

透子 次々とかいってへんし。大人の女は食いしん坊になるだけやから。

千夏 なんか生々しい。大人の女。

と、笑う。

透子 千夏ちゃんもこの夏は恋愛しい。これ課題。

千夏 課題？

透子 そう。

千夏 ここでも恋愛の課題。

透子 ？

千夏 今。ちやうど創作実習の授業で、課題出てて。

透子 創作実習。

千夏 自分の「初恋の思い出」を使って、創作するっていう。

透子 わあ、めっちゃ楽しそう。

千夏 ええ。めっちゃ嫌ですよ。

透子 千夏ちゃんの初恋っていつなん。

千夏 ええ…わからん。

透子 わからんことないやん。

千夏、ある思い出を持ち出して話し出す。

千夏 中学の時、

透子 中学？

千夏 ちやうくて。中学の時、嫌 なことがあって。

透子 えなに？

千夏 うん。

透子 深刻な話？ 痴漢とか？

千夏 全然。めっちゃライトな話です。今思ったら。

透子 何。

千夏 中2のときかな。幼稚園からずっと一緒の男子に、からかわれて。

「胸大きくなったな」って。

透子 へえ。

千夏 昼休み。教室で。いっぱい男子いる前で。めっちゃ大声で。なんか、みんなの視線が一斉に私の胸に注がれたみたいになって。それがなんかめっちゃ嫌やって。

透子 ああ。なんかわかる。

そして、自虐的に。

透子 って私の胸見て「どこが」って顔すんのやめてくれへん？

千夏 はあ？ してへんし。

笑い合う。千夏、改めて、

千夏 なんか変な感じしてん。

透子 変な感じって？

千夏 うん。なんか、まだ子供やのに、大人として扱われてるっていうか、そういう対象として見られるのを自覚するっていうか。なんか、急にその頃から、普通に駅とか歩いているときも、男の人から見られてる感じがして。私のおっぱいなんか見てどうするんって。特別大っきくもないのに。

透子 ふーん。私は逆かも。早く大人に見られたかったし、そう見られてるって思ったら、ちよつと気分良かった。

千夏 トコちゃんは、かわいいもん。

透子 そうやけど。

千夏 おい。

透子 うそ。でも、千夏ちゃんかてかわいいやんか。

千夏 私なんか、イモです。

透子、冗談の意味で黙る。

千夏 いやなんか言うて。

透子、笑う。

千夏 4月にな、健康診断やってん。新入生対象の。

透子 何急に。

千夏 ちやうくて。はじめて乳がん検診とか受けて。希望者だけやけど。

透子 あれか。マンモグラフィ。ぎゅーって挟むやつ。

千夏 私もそれやるんかと思ってんけど、十代はマンモグラフィってあんましやらんねやって。

透子 そうなんや。

千夏 やったんは、超音波？ エコーのやつ。おじさんのお医者さんで。

なんか、私、ちよつとだけ涙出てん。

透子 繊細やな。

千夏 だって、男の人に触られたことないのに。

透子 お医者さんやん。モノとしか見てへんて。

千夏 頭ではわかってんねんけど…。あの中2のときの事件が引き金になってる気がする。

透子 事件。

千夏 事件ていうほどちやうけど。…全部お母さんのせいやねん。

透子 アッコさんのせいって？

千夏 お母さん、ずっと私にブラジャー買ってくれんくて。

透子 え、なんで。

千夏 仕事忙しすぎて気づかんかったんかしらん。娘の成長に。

透子 そんなことある？

千夏 それで、体育の時間とか、困って。それで、からかわれて。

透子 ええ。

千夏 中3になってやっと。お母さん、私に何も言わんと、スポーツブラみたいなん、私の机の上に置いて。

透子 不思議。あのアッコさんやで？ 想像できへん。

千夏 なんでかわからへんねんけど。

陶子 え、ナプキンとかは買ってもらってたん？

千夏 それはうん。でもブラジャーは、私も触れたらアカンのかなって思っ、机に置いてあったやつ、黙ってつけた。

透子、妙に感心して、

透子 そのこと書いたらええやん。

千夏 え。

透子 そのエピソード。「引き」あるよ。

千夏 やけど、

透子 からかってきた同級生の男 子を初恋の相手にして書いたらえ

えやん。

千夏 え。初恋の相手ちゃうし、

透子 そこは創作すんねやんか。創作実習やねんし。

千夏 うーん。

透子 で、実際の初恋はいつなん。

千夏 実際は：幼稚園のとき。

透子 つまらん。

千夏 だって、ホンマやし。

透子 今は好きな人おらんの？

千夏 ええ：おらんことないけど：トコちゃん、お母さんに言うもん。

透子 言わんよ。

千夏 いや、わからん。好きなんかどうか。

透子 あれ、なんかデジャビュ。こんな話、したことなかったっけ？

千夏 ないと思う。

透子 そっか。ごめん。

千夏 私、付き合ったりしたことないからなあ。

透子 誰かて最初はそうやんか。

千夏 そうやけど。あー、恋愛の練習させてくれる人、おらんかな。

透子 それってどんなんよ。なんか嫌やわ。

千夏 確かに。

透子 恋愛に練習なんかないよ。実習あるのみ。恋愛実習。

千夏 恋愛実習。

千夏、ちよつと黙ってから。

千夏 なあ。

透子 ん？

千夏 変なこと聞いていい？

透子 なに。

千夏 男の人に、ていうか、好きな人に、体触られるんって、どんな感じ

なん？

透子 それ、この時間にパン屋で話す？

千夏、急に周囲が気になって。

千夏 撤回撤回。

透子 やー、千夏ちゃんとそういう話しすることになるとは。おばちゃん

嬉しいわ。

千夏 撤回です。撤回。絶対お母さん言うたらあかんよ。

透子 わかっているって。

千夏、下を向く。

同日、夜7時頃。

マンションの共用部分。

光輝がいる。そこに昭子が現れて。

昭子 こうちゃん。

光輝 あ、こんばんは。

昭子 大学の帰り？

光輝 はい。

昭子 なんか、シュツとしたな、こうちゃん。

光輝 シュツと。(笑う)

昭子 「シュツ」やんか。モテるやろ。

光輝 そんなことないです。

昭子 絶対モテるわ。シュツとしてんもん。

光輝 ありがとうございます。って言うときます。

昭子 今朝、千夏と喋ったやろ。

光輝 はい。

昭子 子供のときみたいにな、また仲良くしたってな。て、まだ子供か。

と、笑う。光輝も笑顔で返す。

昭子 そうや。こうちゃん、サーカス行かん？

光輝 サーカス？

昭子 会社でチケットもらって。うちの会社の人も一緒やからアレやねんけど、千夏も来るし。

と、言いながらサーカスのチケットをカバンから取り出して光輝に渡す。  
チケットにあるイメージ写真を見ながら、

光輝 昔ながらのサーカスって感じ。

昭子 な。地道にやってはんねん、こういう人らも。

光輝 ですね。うちの学科の卒業生にも、サーカス団員になった人もおるって。

昭子 そうか。そうやんな。それやったら余計見といたらええやんか。行こ。

光輝 ええ。(肯定のようにも、戸惑いのようにも聞こえる)

昭子 遠慮しないでええやんか。

光輝 遠慮とかちゃうけど。稽古があるかもしれないんで、ちよつとスケジュール確認します。



昭子 稽古。芝居の。  
光輝 はい。  
昭子 ええな、夢あって。こうちゃんやったら絶対なれるわ、役者さん。  
光輝 がんばります。  
昭子 今のうちにサインもろとかんと。違うか？

昭子、笑う。

光輝 親戚のおばちゃんみたいなこと言う。  
昭子 ホンマやんか。  
光輝 また良かったらお芝居来てください。  
昭子 行く行く。  
光輝 サーカス、また連絡します。一旦これ、

と、サーカスのチケットを返して、

昭子 はい。千夏の連絡先知ってる？  
光輝 ああ、わからんかも。  
昭子 そしたら教えとくわ。  
光輝 あ、はい。

と、二人、スマホを取り出す。連絡先が伝えられる。  
(光輝と昭子、やがて退場)

透子 時間大丈夫？

千夏 あー、じゃあそろそろ行きます。

透子 うん。多分サーカスで会うし、そんなとき本持って行くわ。

千夏 サーカス？

透子 今度の日曜。お母さんに聞いたらわかる。

千夏 え？

透子 デートの付き添い。

千夏 全然わからへん。

透子 今日、アッコさん、口説かれてん。

千夏 はあ？

透子 東京の男に。

千夏 ちよつと待って、

透子 ほんまは千葉やけど。

千夏 なんなんそれ。

透子 今日から来たった中途の人。「良かったら、一緒にサーカス行きませんか」って。

千夏 なんでサーカスなん。

透子 そこはええの。職場でデートに誘われるって、なんかすごない？

千夏 いくつの人？ 相手。おじいちゃんとかちゃうん。

透子 まだ50にはなっていないと思う。

千夏 ええ。

透子 アッコさん、「女」の顔になってた。

千夏 ありえへん。

透子 なんでよ。まだアッコさん四十代やろ？ 全然恋愛できるって。

千夏 キシヨイキシヨイ。

透子 そんなん言うけど、ずっとシングルマザーでがんばってきて。うちみたいな地味な縫製工場で、ひとり娘を大学にまでやって。今こそ「女」

を取り戻すタイミングやんか。

千夏 ひよえーですよ。

透子 それ言うたら、千夏ちゃんがその歳で恋愛経験がないのも「しよえー」やから。

千夏 「ひよえー」です。「しよえー」やなくて。

透子 なんでもええやんか。

二人、笑って、

千夏 あかん、時間やばい。

透子 ごめん、引き止めた。

千夏 ていうか、めっちゃ嫌な話で終わった。そうやって身内の情報簡単にバラすからなトコちゃん。

透子 千夏ちゃんの「おっぱい触らりたい願望」は絶対言わへんから。

千夏 ちよつと！？ そんな話してへんし。

透子、いたずらに笑って、

透子 うそ。まあ、アッコさんの新しい恋愛も応援してあげて。

千夏 嫌やあ。

透子 新しいお父さんになるかもしらんねんで。

千夏 だからやめてくださいよ。

透子 うそ。あ、またおいしいパン屋さん見つけたら教えてな。

千夏 あ、はい。

透子 じゃあ。

透子と千夏別れる。(透子、退場)

千夏、透子を見送る。(やがて退場)

同日10時半頃。

武藤家。

昭子がサーカスに着て行く予定の洋服を見繕っている。

千夏がバイトから帰ってくる。

千夏 何してるん。

昭子 びっくりした。帰ったんやったらただいま言いなさい。

千夏 ただいま。

昭子 また遅い。ゴハンは。

千夏 バイトの前にトコちゃんとパン食べた。

昭子 トコちゃん？ 今日？

千夏 うん。駅で会うてん。

昭子 本借りれた？

千夏 いや、今日の今日で無理やん。

昭子 そらそや。

千夏 で、何してるんよ。

昭子 うん。洋服ダンス整理しててな。最近着てへん服、まだ着れるかな、  
思ってる。

千夏 なんでまた急に。

昭子 別にええやんか。

千夏 別にええけど。

妙な時間が流れそうになるのを千夏が嫌って、

千夏 え、もしかしてサーカス？

昭子 あ、聞いた？(トコちゃんから)

千夏 チラっと。

昭子 あんたも行くねんで。

千夏 勝手に決める。

昭子 トコちゃんも一緒やねんし、ええやん。

千夏 そうやけど。

昭子 久しぶりにみんなで遊びに行くの、楽しみやろ。

千夏 みんなって、他に誰？

昭子 うん。会社の上司の人も一緒やねんけどな。

千夏 上司。

昭子 まあ、ええ人やし。

千夏 どんな人。

昭子 なんか、東京の人。

千夏、わざわざ知らないフリをして、

千夏　：女の人？

昭子　男の人。

千夏　へえ。

昭子　トコちゃん言うてへんかった？

千夏　そこまで聞いてへん。

昭子　なんか、社長が強引にセッティングしたらしくて。大阪で友達おらんから、付き合ってたつてくれって。

千夏　いい大人が友達も何もないやん。

昭子　うん。まあ、ええやんか。たぶんお昼とかご馳走してもらえんで。

千夏　出た。どうせご飯で釣られたんやろ。

昭子　バレた？

千夏　そんなことやと思ったわ。

昭子　こうちゃんも誘ってたん。

千夏　は？　なんで。

昭子　さつきマンシヨンの下で会ってたやん。

千夏　意味わからん。

昭子　お芝居の練習なかったら、って言うてたけど。あんたの電話教えたから、また連絡あると思うわ。

千夏　え。

昭子　連絡先くらい知ってる思ってた。

千夏　勝手に何してるん。

昭子　なんもあかんことないやんか。

千夏　なんもあかんことないけど。

昭子　まあ、そういうことやから、次の日曜頼むで。

千夏　なんでこうちゃんまで誘うん。会社の人おるのに、迷惑やんか。

昭子　そんなことないって。私も久しぶりにこうちゃんと喋りたいし。もう。

千夏　それより。あんたの部屋。あれなんとかしい。

昭子　何急に。

千夏　脱いだ服散らかしっぱなしやし。掃除もできへん。

昭子　また着るの。

千夏　机の上もグチャグチャやんか。

昭子　机触らんといてよ。

千夏　本やらプリントやら、紙ばっかり。燃えんで。火事なんで。

昭子　なんで燃えるんよ。

千夏　あんなんで課題なんかやれ　　るんかいな。

千夏 後できれいにするから。  
昭子 せえへんやんか。ちよつとは整理せんと。  
千夏 やるって。

昭子 あんたは返事ばっかし。  
千夏 言霊やんか。言葉にすれば、いつかきつと叶う。  
昭子 何を言うてるんよ。やるかやらんかだけやないの。今やり。  
千夏 今？　なんで今。  
昭子 そしたらお母さんやったる。

と、千夏の部屋に行くそぶり。

千夏 ちよう、やめて。やるから。  
昭子 はい。言霊叶った。  
千夏 もう。

千夏、仕方なく、自分の部屋へ。  
昭子も自分が出した洋服を畳むなどする。  
ほどなく、千夏が健康診断の「再検査のお知らせ」の封筒を持って戻る。

千夏 お母さん。  
昭子 なによ。  
千夏 再検査のお知らせ。  
昭子 え。

千夏、封を切り、中身の手紙を取り出し、目を通す。

千夏 え。  
昭子 何よ。  
千夏 なんか、精密検査せなアカンみたい。  
昭子 精密検査？  
千夏 4月に受けた検診。乳がんの。  
昭子 え？

千夏、昭子に封書を見せる。

昭子 もう、机の上ぐちゃぐちゃにしてるからやんか。こんな大事なん。  
千夏 だって。  
昭子 どうするんよ。  
千夏 どうするって何。

昭子　ちやうやんか。検査、時間とか決まってへんの。  
千夏　近くの診療所ですって書いてある。  
昭子　そしたら、とりあえず、明日病院行こ。

昭子、ふと仕事のことを思つて、

昭子　明日か。

千夏　いいよ。一人で行ける。

昭子　あかん。お母さん一緒に行く。やけど、こんなんいきなり行つて診てもらえるん？

千夏　さあ。

昭子　行つてみなわからんか。あんた、明日授業休んで大丈夫なん？

千夏　わからんけど。

昭子　そんなん言うてる場合ちやうやんか。とりあえず、早よ寝な。お風呂沸かすし。

千夏　私、やる。

昭子　ええよ。じつとしとき。

千夏　なんでよ。

昭子　なんでや。ほんならお風呂洗つてきて。

千夏、昭子を取り乱しているのを感じて、

千夏　ちよつと。どうしたん。

昭子　なに。

千夏　再検査するだけやんか。

昭子　そんなんちやうよ。ちよつと心配してるだけやんか。

千夏　検査してみなわからんし。

昭子　そらそらや。

千夏の携帯に着信。

昭子　びっくりするやんか。もう。

千夏　電話に言うてもしやーないやんか。

画面を見るが、見覚えのない番号。

昭子　誰。病院？

千夏　なんでよ。

千夏、応答ボタンを押して、

千夏　もしもし。

相手は光輝だった。

千夏　うん、千夏。大丈夫やで。バイト終わって帰ってきたとこ。

昭子　誰？　こうちゃんか？　こうちゃんやな。

昭子、洋服を仕舞いにいく。(退場)

千夏　なんか、ごめんな、お母さんが。サーカス。私もさつき聞いてびっくりしてんだけど。全然無理せんでええから。

通話のまま、自室へ向かう。(やがて退場)

光輝の部屋。千夏と通話。

光輝　俺もびっくりしたけど、なかなかサーカス見るチャンスないし。面白そうやし。舞台の参考になるかもしれないし。

やけど、俺、ええんかな。なんか、おばちゃんとこの会社の人とか来るんやんな？

トコちゃん？　ああ。今日言うてた人。て、その人来ても俺的には別に変わらんやん。千夏がちゃんと俺の相手してや。頼むで。

(光輝、退場)



翌日の午前。病院の帰り道。  
太陽が高い。  
千夏が前に行く。

千夏 暑う。

昭子が立ち止まる。千夏、振り返って、

千夏 もう。なんでお母さんが落ち込んでるん。

昭子 ……。

千夏 普通は私がそうなって、お母さんが慰めてくれるんちゃうん。

昭子 わかっている。別に落ち込んでるとかちゃうから。

千夏 精密検査の結果出るの、1週間後やし。

昭子 でもなんかあの先生の説明、なんか、もう、悪性みたいな言い方  
やったやん。

千夏 ちゃんとガンの種類とか、大きさとかわかってから、きちんと治療  
したら完治するって言うてたんやんか。

昭子 もう、なんであんたがこんな目に遭わなあかんの。

千夏 お母さん。大丈夫やから。

昭子 ……。

千夏 検査して良かったやんか。

昭子 ……。

千夏 お母さん、お昼までに会社行くんちゃうん。

昭子 行くけど。

昭子が煮え切らない態度なので、

千夏 お母さん。

昭子 何。

千夏 結果出るまでずっとこんなん嫌や。

昭子 わかっている。

千夏 普通にしている。

昭子、反省する。

千夏 サークাসも普通に行くし。

昭子 うん。

一瞬、会話が滞りそうになる。

昭子 今日何食べたい？

千夏 うーん。肉。

昭子 肉で。

千夏 シンプルにステーキ。

昭子 ステーキなんか家で焼いても美味しくないやん。

千夏 食べに行ってもええよ。

昭子 食べに行ったら高い。

千夏 安いところもあるって。

昭子 安いところは美味しくないって。

千夏 探したら安くて美味しいところあるよ。

昭子 そんなところ混んでるわ。

千夏 なんなんそのステーキ包囲網。鉄壁やん。絶対食べられへん。

昭子 そや。ステーキは木村さんにごちそうになる。

千夏 誰よ。

昭子 今度サーカス一緒に行く人。

千夏 ステーキは無理やろ。

昭子 いけるやろ。係長やし。

千夏 ホンマに？

昭子 ホンマホンマ。

千夏 そしたら、期待しとくで。

昭子 うん。言うとか。そしたら、今日は、なんでもええな。

千夏 結局。

二人、笑う。

千夏 会社。早よ行き。

昭子 あんたは。大学。

千夏 行くよ。創作実習の課題やらなアカンし。

昭子 なんかしんどかったら連絡してや。

千夏 だから。変な心配せんといてって。

昭子 わかってる。

千夏 あ、トコちゃんにも言うたらアカンで。

昭子 言わへんよ。なんで言うんよ。

千夏 言いそうやんか。

昭子 言わへん。

千夏 うん。

昭子 ほなね。

千夏 うん。

行きかける昭子に、

千夏 お母さん。

昭子、振り向く。

千夏 いってらっしゃい。

昭子 はい。

(昭子、退場)

立ち尽くす千夏。

日差しが千夏を照らす。太陽を見て、

千夏 暑う。

ハンカチで汗をぬぐう千夏。

そのまま、ハンカチで目を覆う。

同日、正午頃。マスモリ繊維の休憩スペース。  
昭子がトボトボとやってきて座る。パンを取り出す。  
木村が現れて。

木村 朝、病院だったんですね。  
昭子 木村さん。  
木村 あれ、元気ない。体調悪かったら、無理しないでくださいよ。  
昭子 あ、いや。私と違うんですけど。  
木村 え？  
昭子 病院。娘の付き添いで。  
木村 どうかされました？

昭子、まだ何も言うべきではないと思い、黙る。  
木村も察して、

木村 立ち入った話でしたら、アレですけど。  
昭子 え。  
木村 何かあればいつでも。  
昭子 すみません。  
木村 いいですか、隣。  
昭子 ああ。

木村、昭子の隣でコンビニで買ったパンを取り出す。

木村 僕もパンです。  
昭子、愛想で返す。  
透子が現れる。

透子 あ。  
木村 ああ、お疲れ様です。  
透子 すみません、お邪魔でした？  
木村 なんです。  
透子 あれ、アッコさん、どうしたんですか？  
昭子 何。  
透子 元気ない。  
昭子 そんなことないって。あ、そうや。サーカス。千夏と千夏の友達連れていくんで。チケット、余らせず にすみました。

木村 ああ、そうですか。  
昭子 はい。

その後が続かず、木村が間を埋めるように、

木村 楽しみですね。

透子 絶対アッコさんなんかあった。

昭子 何。

透子 だって、パン出してるのに、食べへんのおかしいやんか。

昭子 どういう意味よ。

透子 アッコさん、食べ物目の前にあったら、秒で口に入れるやん。ほん

で秒で食べ終えるやん。

昭子 人を腹ペコチンパンジーみたいに。

透子 どうしたんですか。

昭子、黙る。

透子 千夏ちゃんとケンカでもした？

昭子 してへんよ。

木村 あんまり、ね、深掘りしなくても。

透子 え、木村さんなんか知ってるんですか？

木村 いや、知らないですけど。

透子 ええ？

昭子 なんもないって。

透子 なんがある言い方やん。

木村 まあ、デリケートなことかもしれないですし。

透子 デリケートなこと？

昭子 ちよっと木村さん。その言い方やとなんかある感じになるでしょ。

木村 え、ああ、すみません。

昭子 お昼食べてください。トコちゃんも、またパン買ってきたんやろ。

今日、3人もパン。

透子 いやいやおかしなおかしい。アッコさん。

昭子 なに。

透子 言うてよ。

昭子 何を言うんよ。

透子 アッコさん。

透子の問い詰める目。

木村 まあまあ。

透子 あと一押しで言うやん。

木村 もうそのくらいで。

透子 ちよっとすみません木村さん。

木村 はい。

透子 思ってること言っていないですか。

木村 はい。

透子 たぶん、木村さんが席外してくれたら、アッコさん喋ってくれと  
思います。むしろ喋りたいんやと思います。

木村 え？ あ、僕？

透子 はい。

木村 わ、全然気づかなかった。すみません。

昭子 いや、ちやうねんトコちゃん。ホンマ、なんでもないから。

透子 ええ。(不満)

昭子 そんな落ち込んでるように見えたんやったらごめん。

透子 アッコさん。

昭子 話さなアカンときがきたら、まずトコちゃんに言うから。

透子 もう。めっちゃ気になる。

昭子 あと、木村さんにも。

木村 はい。何か力になれることがあれば、いつでも相談してください。

昭子、思い出して、

昭子 あ、そうや。

二人「？」

昭子 ステーキ。

木村 ステーキ。

昭子 サーカスのときに、ステーキ奢ってもらえませんか。

透子 しおらしくしてると思ったら、何をどさくさに紛れて。

昭子 違って。木村さんにステーキご馳走してもらいたくて。

透子 何も違うないし。

昭子 すみません。突然に聞こえるかもしれないんですけど。

透子 突然にしか聞こえませんかよ。

木村 なんだかわかりませんが、いいですよ。何か、ご馳走します。

昭子 何かっていうか、ステーキ。

木村 はい。

透子 何これ。この一連が新手の タカリやとしたら、天才ですよ

アッコさん。

千夏の課題。原稿を読む。

千夏 マンションの下で、子供用のビニールプールを広げて、園芸用の蛇口から勝手にホースを引いて水を張る。あの生ぬるい水に、同じマンションの、同じくらいの年の子供たち。等しくワニみたいに腹ばいに浸かる。たくさんの女の子の中に、男の子が一人いて。女の子の水着は、胸をまったく隠せてないんやけど、誰もそのことを気にしてない。ただ、一人。私だけは違う。幼い、平らなが胸が見えんように、何度も何度も肩紐を引っ張り上げる。なんでか言うたら、同じ水に浸かっているオスのワニが気になるから。あの子に見られるんが恥ずかしいから。本当は誰も見てへんのに。私の自意識はませてたんやと思う。

オスワニと一緒に幼稚園を卒園して、同じ小学校に通った。うちは母一人、娘一人の家庭やったから、低学年の頃はよくオスワニの家に預けられた。一緒に花火したり、市民プールいったり、自由研究したり。夏の思い出が多いんは、夏休みの時間を二人で過ごしたからかもしれん。私はいつもオスワニを気にした。いつか、このワニと恋仲になるかもしれんと胸を踊らせた。少しずつ、少しずつ、オスワニへの想いが、私の胸を膨らませる。

頭の中で推敲する。

千夏 「胸を膨らませる」って。狙いすぎちゃう。

気を取り直し、

千夏 人生でもっとも嫌悪される時期。自分も、周りも、誰からも嫌悪される、「中学生」という存在になって、私とオスワニには距離ができた。もう同じプールの水に浸かることはなく、夏の二人の記憶も更新されることもない。

やけど、胸はずっと膨らんでいる。オスワニのことで胸はいっぱいやった。ある日、そんなに喋ることもなくなったオスワニが、私のクラスにやってきて、目が合うなり言い放った。

「お前、胸デカなったな」

私はなんも言えんかった。私の胸が大きくなったんは、あんたのせいやって言っただけだった。

黙る。

千夏 あかん。めっちゃ恥ずしい。 誰にも見せられへん。



千夏、原稿を見る。

千夏　暗いわ。創作やねんから、もっと派手なん書けたらええのに。たとえば、サーカスみたいな。

【 11 】

サーカスの日曜日。  
サーカス会場の客席にいる5人。前列に千夏、光輝、透子、後列に木村と昭子。

目の前で繰り広げられるサーカスを楽しんでいる。  
途中休憩のアナウンスが入り、

昭子 はい、休憩。トイレ行く人早よ行きや。混むで。

透子 大丈夫です。

昭子 (千夏に) あんたは。

千夏 行っところかな。

昭子 そしたら行こ。

と、昭子と千夏、席を立った。(退場)

木村 いやあ、意外とサーカス面白いねえ。

透子も光輝も返答のタイミングを失う。

木村 面白いなあ。光輝くんは、演劇やってるんでしょ。

光輝 はい。

木村 今度のお芝居、ピエロの役なんだって？

光輝 いや、ピエロの役ではないんですけど。

木村 あれ、そうなの。

光輝 ピエロの話っていうか。

木村 へえ。(会場を指して) いっぱい出てきてるじゃん、ピエロ。

光輝 ですね。

木村 写真とか撮った？

光輝 ああ、ええ。まあ。

木村 衣装とかも参考になるもんね。

光輝 ええ。

木村 今日来て一番良かったの光輝くんだったりして。はは。

光輝、笑顔で返す。

木村 ね？

光輝 ええ。

木村 いやあ。面白いねえ、サーカス。

会話が行き詰まる。木村、何気なくスマホを見る。

木村 あれ、社長から着信。(透子に)

透子 え。日曜なのに。

木村 ちよつとごめん。

木村、電話をかけに席を外す。(退場)

木村が去ってから、透子が笑う。

光輝 なんですか。

透子 このメンバーで絶対残したらアカン3人残して、ようあの親子トイレ行ったな、思ってた。

光輝 ホンマですよ。千夏には言ってたんですけど。俺に気を遣えって。

透子 木村さんとうちちゃん、どこまで会話続くんやろうってドキドキした。

光輝 俺はいつ助け舟出してくれるんか思っていました。

透子 ごめんごめん。でも、演劇のチラシとか渡したら良かったんちゃうん。話の種になるやん。絶対来てくれるやろうし。

光輝 ちよつと悩みましたけど、実際来られても、微妙かなって思ってた。

透子 お客様選り好みするん？

光輝、チラシを出して、透子に渡す。

光輝 透子さんこそ来てくださいよ。

透子 うーん。

光輝 シェイクスピア興味あるんですよ。

透子 興味あるっていうか。そもそもこの作品、シェイクスピア関係あるん？

光輝 ないです。

透子 なんじゃい。

二人、笑う。

透子 こうちゃん、もしかして、今日のサーカス、ピエロ参考になる思ってた来たんちゃう？

光輝 え。なんでわかるんですか。

透子 「フォルスタツフ」↓「道化」↓「ピエロ」って、連想したんちゃうかなって思ってた。

光輝 うわ、なんで。むっちゃ恥 ずい。

透子 正直、今日、全然参考になってへんやろ？

光輝 はい。

透子 即答。

光輝 はい。

透子 別に本物のピエロ演じるわけちゃうもんね。「ピエロ的な人」ってことやろ？

光輝 なんか全部見破られる。

透子 だから芝居も観んでもわかるし。

光輝 ええ。

透子 うそ。それはうそ。ここまで言うたし、観に行こつかな。

光輝 マジすか？

透子 日にち決めたら連絡するわ。連絡先いい？

光輝 やった。

と、スマホを開いて連絡先を交換する。

透子 こうちゃんって、苗字なに？

光輝 川柳です。「せんりゆう」と・書くけど読みは・「かわやなぎ」。

五・七・五調で言う。

透子 おもんない。「こうちゃん」で登録しよ。

光輝 ええ。これ鉄板の自己紹介やのに。

透子 柄井川柳(からい・せんりゆう)は知ってる？

光輝 わかりません。

透子 こうちゃんに・川柳(せんりゆう)語る・資格なし。

と、五・七・五調で返す。

光輝 なんですかそれ。

笑い合う二人。

そこに木村が戻り、

木村 武藤さん、まだ？

透子 ああ、まだですけど、どうしました？

木村 いや、

昭子と千夏が戻る。

木村 武藤さん。

昭子 急いで行って正解。今めっちゃ行列。

木村 今、社長から電話あって。

昭子 え？

木村 今日午前中納品でお願いされてたサンコーアパレルさん、まだサンブルが届かないって。

昭子 ええ？

木村 午前指定で発送してくれてますよね？

昭子 ええ、どうやら。誰やら発送したん。

木村 今日中には絶対必要らしくて。

透子 送り状の控えあるんちゃいます。番号で追跡できるんちゃうかな。

昭子 今日日曜やで。会社誰もおらんやろ。

木村 ええ。

透子 社長に行ってもらえないんですか。

木村 それはちよつと。

昭子 そらそやわ。

昭子、一瞬考えて、

昭子 私か。

木村 武藤さん。

昭子 私しかおらんやん。

木村 すみません。一緒に(行ってもらっても)いいですか。

昭子 行きますしよ。

昭子、千夏に、

昭子 ああ、あんたらは最後まで見てっいたらええから。

千夏は光輝に視線を送って、反応を見ようとする。

透子 私も行きますよ。車の方が早いでしょ。

昭子 布帛のことやし、トコちゃんええよ。終わったら、この子ら送っ

たって。

透子 でもそっち急ぎでしょ。また戻ってきてもいいし。

千夏 それやったら電車で帰るし。ていうか、一緒に出るし。

昭子 ええって。あんたらは最後までおり。せっかくやねんから。

透子 まあどうするか後で連絡す るとして、とりあえず出ましょ。

もう後半始まるし。ええやんね、千夏ちゃん。こうちゃんも。

光輝 はい。

木村 じゃあ、すみません。行きましょう。

昭子 ごめんな、こうちゃん。また埋め合わせする。

光輝 全然大丈夫です。

木村 すみません、なんかバタバタ。

千夏 トコちゃん、運転気をつけて。

透子 うん。

3人、サーカス会場を後にする。(退場)

同時に、サーカスの演目が再開するブザーが鳴る。

プログラム後半が始まった。二人は、無言でサーカスを見つめる。

同日、夕方。

マスマリ繊維の布帛工場。

仕事のトラブルを回避することができた後。

昭子と木村がいて、昭子が透子からの電話を受けている。

昭子　いけた？ サンコーさん、怒ってなかった？ 良かったあ。ありがとうトコちゃん。ホンマ助かったわ。あ、ガソリン代、社長に請求しとくから。うん。もちろん、そのまま帰ってもらって大丈夫。うん。今日は色々ごめんな。はい。はい。ほなね。また明日。

と、電話を切る。

昭子　また明日で。明日も会社やん。日曜にこんなん。休日手当つけてもらわんと。

木村　でも、なんとか間に合って良かったです。

昭子　まさか発送してなかったとは。ダニカやわ、絶対。それがエドナ。いや野村さんか。

木村　まあ、誰でもいいじゃないですか。ありますよ。そういうことも、でもきちんとして注意しとかんと。

木村　それは、はい。明日。頼みますよ、係長。

木村　はい。でも、本当、花内さん一緒に来てくれて助かりましたね。

昭子　ホンマに。トコちゃん様やわ。

木村　今度何かごちそうしないと。

昭子　あの子パンしか食べへんから、パン買うてきてあげてください。

木村　パン。そんなことないでしょ。

昭子　ホンマに。パン主食やから。

木村　じゃあ、…フライパンでもプレゼントしますかね。

昭子　木村さん？

木村　パンはパンでも食べられないパンです。

木村の渾身のジョークに対して、

昭子　木村さん、それ本気で言うてます？

木村　冗談で言いました。

昭子　面白いわ。

木村　あ。褒め言葉。

昭子　いや、違います。今のは完全な皮肉です。

木村 ははは。

昭子は、木村の笑い方が「お愛想」でなくなったのを感じた。

昭子 聞いていいですか？

木村 なんでしょう。

昭子 木村さん、なんで大阪なんか来はったん？

木村 ああ。社長のご好意に甘えて。

昭子 せやけど、転職やったら、東京で良かったやん。別に親戚とかおるわけちゃうんでしょ？

木村 ええ。

昭子 うち、こっちも全然やし。

と、手でお金を示す。

木村 まあそれは。

昭子、今度は小指を立てて、

昭子 やっぱリコレ？

木村 いや…。いや、でも…：そうなのかな。

昭子 ええ？

木村 違うんですよ。えっと、すみません。

昭子 あんまし聞いたらアカンやつ？ それやったらなんも聞かんとくけど。…え、女性関係？ え、セクハラ的な？

木村 どんどん聞いてきてる。

昭子 だって、

木村 ちゃんと言います。ちゃんと言うんで。

昭子 いや、言われへんやつやったら、ええんですけど。

木村 ここで止めたら変な噂立ちちゃうじゃないですか。

昭子 噂で。私、そんなタイプに見えますか？

木村、答えられない。

昭子 見えてるんかい。

木村 いやすみません。違います。言います。

木村、慎重に話す順序を考えてから口を開く。



木村 えっと。僕、千葉で、アパレル系の企画会社にいたんですけど。いつつも出展してる、サンプルの合同展示会に出たときなんですけど。去年の夏。すごく暑い日。会場、朝からクーラー故障しちゃって、灼熱地獄みたいになって。

昭子 わ、私絶対無理。

木村 そのときに、来てたバイヤーの女性の方が、熱中症で倒れちゃったんです。

昭子 あら。

木村 僕、会社で応急看護講習受けたばかりだったんで、時機到来とばかりに、教わった通りに、介抱したんです。

昭子 おお。

木村 本当、教わった通り。それが、「締め付けている衣服を緩める」っていうのが、後々、倒れた女性の方からクレームが来て。

昭子 ええ、なんなんそれ。

木村 ええ。

昭子 え、そんな、別に変なことしてへんのですよ？

木村 してませんよ、変なことなんか。ただ、その、ブラジャーのホックを外したのが、

昭子 え。

木村 いや、締め付けてる感じだったんで。

昭子 それ微妙やな。

木村 本当に、純粹に。

昭子 純粹にブラジャーのホックを外した。

木村 言い方。

昭子 それ男の人がやったらアカンのちゃいます？

木村 今考えたら……。どなたか、女性を呼んで、バトンタッチするべきだったって。後で周りからも言われて。僕も必死だったから。

昭子 うーん。木村さんの真面目さが裏目に出たんか。

木村 その女性の方が、弁護士連れて会社に来て。結局、会社に迷惑掛けられないし、辞めることになって。

昭子 ええ、そんなことあるん？

木村 あったんです。

昭子 なんで戦わへんの。

木村 そんな気力なかったです。良かれと思ってやったことが、こんなことになって。

昭子 理不尽。

木村 結局、少額ですけど、示談金で和解みたいな感じで終わって。まあ、それで済んで御の字というか。

昭子 なんか腑に落ちんわ。

木村 マスモリ繊維の社長さんだけが、気にかけてくれて。大阪でやり直すかって。

昭子 そんな優しさあってんな、うちの社長。

木村 だから、大阪で心機一転です。独身だし、フットワーク軽いんで。

昭子 どんだけ前向きなん。

木村 まあ、数少ない取り柄のひとつです。

と、笑う。

昭子 なんかすみません。根掘り葉掘り。

木村 いや、武藤さん、話しやすいから。

昭子 私、誰にも言いませんから。

木村 まあ、社長が言うかもしれないですけどね。

昭子 いや、社長、言うんやったらとつくに言うてると思います。これは多分、最後まで言わんつもりなんやと思います。

木村、社長の優しさを噛みしめる。

昭子 まあ、ここから木村さんの新しい人生ですね。関西弁、覚えますか？

木村 ええですね。

と、ふざけて下手な関西弁で答えたのを、昭子が笑う。

昭子 関西人、関西弁にはめっちゃめっちゃ厳しいですからね。

木村 そんな気がします。

と、笑い合う。

木村 ちょっとホツとしました。

昭子 え？

木村 武藤さん、元気になった。

昭子 いや、まあ、クヨクヨしてても仕方ないっていうか。

木村、また昭子の悩みに踏み込みそうになったのを舵を切り直して、

木村 武藤さんは、千夏ちゃんと二人暮らし？

昭子 はい。バツイチで。あの子生まれてすぐ離婚して。

木村 そうなんですね。

昭子 やつと大学まで行かせることできて。肩の荷降りました。  
木村 がんばりましたね。

昭子はこれまで他人から劳いの言葉をかけられたことがほとんどなかったので、照れながらおどけるように返答する。

昭子 まあ言うてもまだまだ大学の授業料が生活を圧迫し続けるんですけどね。

木村 芸大って、授業料高いって言いますよね。

昭子 ホンマに。小説家なんかなれるわけないのに。

木村 わかんないですよ。芥川賞とか取っちゃうかも。そしたら左うちわじゃないですか。

昭子 そんなわけないやないですか。娘なんか頼れません。私、生きてるうちは、ここでお仕事がんばらせてもらお思ってますんで。お願いしますよ、係長。

木村 ああ、はい。

昭子 あの子には、普通に就職して、普通に結婚して、離婚せんと、家族持ってくれたら、それでええですわ。

木村 まあ、そういうもんですよね。自分の生活が「普通」って思えるのが、一番幸せかもしれないですね。

昭子、突然千夏の病状を思い、顔を伏せる。

木村 どうしました？

昭子 いえ。すみません。なんでも。

木村 ……。

昭子 すみません。

木村 僕の方こそ、なんか変なこと言っちゃいましたか。

昭子 いや、全然そんなこと。

昭子、気を取り直して、

昭子 あの子らちゃんと帰れたかな。

木村 え？ ああ、大学生だし、大丈夫でしょ。

昭子 うちらもボチボチ出ますか。  
木村 ですね。

と、会社を出る支度をする。

それぞれの帰り道。

◇ 千夏と光輝。サーカスが終わりの帰り道。

千夏 あんな場所に、トラとか、象とか、不思議やな。

光輝 サーカスの感想、そこ？

千夏 あと、テントの裏側にあつたコンテナみたいなやつ。あつこで団員の人が暮らしてんのかなつて思ったら、すごい。

光輝 ショーの感想わい。

千夏、笑う。

光輝 ちょっと似てんな。

千夏 え。

光輝 透子さんと千夏。

千夏 ホンマ？

光輝 なんか、物言いとか、感覚とか。

千夏 私が影響受けてるんやと思う。

光輝 ええな。お姉ちゃん的存在。

千夏 ええやろ。

光輝 オモロイし。

千夏 うん。

光輝 喋りやすいし。

千夏 かわいいし。

光輝 人懐っこい。いきなり「こうちゃん」とか呼んでくるし。

千夏 うん。

光輝 今何歳くらいなん。

千夏 30。

光輝 見えへん。

千夏 やろ。

◆ 一方、昭子と木村も帰路につく。

昭子 木村さんは、一回も結婚せず？

木村 はい。長くお付き合いした女性はいましたけど、結婚まで行きませんでした。

昭子 そうなんや。  
木村 だいぶ昔の話ですけど。  
昭子 ごはんとかどうしてはるんですか。  
木村 夜？ まあ、夜はだいたいスーパーのお弁当ですかね。近くのスーパー、200円代のお弁当があるんですよ。  
昭子 そんな美味しくないでしょ。  
木村 まあ、独身男性の食事なんてエサみたいなもんです。  
昭子 アカンよ。ちゃんとしたもん食べんと。早死にしますよ。  
木村 そうなんですけどね。

◇

千夏 なあ。  
光輝 ん？  
千夏 私、中学のとき、こうちゃんのこと、「こうちゃん」って呼んでたっけ？  
光輝 え。どやろ。中学のときのこととか、全然覚えてへん。  
千夏 そう：やんな。  
光輝 あんま喋ってへんのちゃう？ 思春期やったし。  
千夏 そうかも。

少し無言の時間。

千夏 同じマンションなのに、高校のとき全然顔合わさんかったね。  
光輝 俺、学校遠かったし。6時には出たから。  
千夏 早っ。私絶対無理。  
光輝 芸大も遠いけど。  
千夏 ホンマに。

◆

木村 独身も気楽と言えば気楽ですけどね。ただ、この歳になると、このまま一人で死んでいくのかなってときどき考えちゃいます。  
昭子 わかる。孤独死だけはパス。  
木村 マスモリで働いてる限りは、誰かが見つけてくれそうですけど。  
昭子 無断欠勤したら、すぐ私が飛んで行きますから。その日の午前中に発見します。  
木村 よろしくお願いします。

◇

光輝 どうなん、文芸学科。

千夏 まだなんとも。

光輝 小説とか書いてるん。

千夏 創作実習があるから。今まさに書いてるところ。

光輝 へえ。書いたら読ませてや。

千夏 絶対嫌。

光輝 なんでやねん。

千夏 これだけは絶対無理。

光輝 え、それおかしな？ 読んでもらうために書くんちゃうん。

千夏 そうやねんけど。役者とは違うねん。基本、文芸の人は暗いねんか

ら。恥ずかしがり屋やねん。

光輝 役者かって恥ずかしいって思う時あんで。

千夏 うそ。

光輝 うそ。

千夏 なんそれ。

光輝、笑って返す。

◆

木村 マスモリは家族的な会社だし、外国人の従業員も分け隔てなくとい

うか、そういう雰囲気いいですよ。

昭子 そう？ 長く働いてるとわからんけど。

木村 武藤さんの人徳ですよ。

昭子 私？ なんで私？

木村 僕はそう思います。

昭子 なんですかそれ。なんも出ませんよ。

木村 何もいりません。仲良くしてもらえたら、それで。

昭子 仲良くって。子供ちゃうんですから。

◇

千夏 今書いてる課題は無理やけど。もし、もっといいの書けたら。いつ

になるかわからんけど、もっといいの書けたら、読ませてあげる。

光輝 それいつなん。

千夏 わからんけど。

光輝 10年後とかナシやで。

千夏 10年後。10年後って、どうなってるんやろ。  
光輝 どうなってるんやろな。

◆  
木村 大人になってから友達作るのって、本当に難しいですから。  
昭子 そういうもんですかね。  
木村 男は特に、あるかもしれませぬ。  
昭子 まあ、ちよくちよく遊びましょ。今日みたいに。  
木村 ぜひ。

◇  
千夏 あー、なんかお腹空いた。  
光輝 そうやな。

千夏、思い切って誘う。

千夏 どっか寄ってく？  
光輝 どっかかって？  
千夏 パン屋さん？  
光輝 ええ、パン。  
千夏 どこでもええねんけど。

◆  
昭子 今日はありがとうございました。

木村、去る。(退場) 木村を見送る昭子。

◇  
光輝 うーん。やっぱ金ないし、やめとこかな。  
千夏 そっか。  
光輝 ちよつと百均で小道具買ってから帰るわ。芝居の。  
千夏 ああ、わかった。じゃあ、また。  
光輝 うん。  
千夏 今日はありがとう。  
光輝 じゃ。

光輝、去る。(退場)

光輝を見送る千夏は、満たされた気分である。

▼  
千夏と昭子が鉢合わせる。

千夏 お母さん。

昭子 あれ、こうちゃんは。

千夏 なんか百均寄るって。

昭子 そう。悪かったな、こうちゃん。

千夏 大丈夫やと思う。仕事の方は？

昭子 大丈夫大丈夫。どうやったサーカス。

千夏 まあ、良かったよ。

昭子 それやったら良かった。

千夏 こうちゃんと久しぶりに喋ったわ。

昭子 良かったやない。

千夏 トコちゃんのこともお姉ちゃんみたいでエエなやって。

昭子 そうか。こうちゃんもあんたも一人っ子同士やもんな。

千夏 うん。

昭子 お腹減った。何か食べて帰る？

千夏 ええよ。家で。

昭子 作んの私やんか。

千夏 あ、そういえば、今日木村さんにご馳走になってない。

昭子 ホンマや。ステーキ。

千夏 あ、トコちゃんに本借りんのも忘れてた。

昭子 また会社で預かっといたるやん。

千夏 いい。また連絡する。今日全然トコちゃんと喋れんかったし。

昭子 うん。そうしい。

▽  
千夏と別れた光輝が透子に電話をかけている。  
つながる。

光輝 あ、出た。

透子 出たって何よ。

光輝 今日はお疲れ様でした。

透子 うん。無事帰れた？



光輝 はい。透子さん、もう仕事片付いたんですか。  
透子 片付いてたらなんなん。  
光輝 え、なんか機嫌悪いですか？  
透子 全然。  
光輝 良かったら、ごはん、連れてってくれませんか？  
透子 厚かましい誘い方。  
光輝 すみません。  
透子 千夏ちゃんは何？  
光輝 今駅で別れました。  
透子 二人で食べて帰ったら良かったのに。  
光輝 大学生は常に金欠やから。  
透子 情けない。  
光輝 はい。  
透子 「はい」ちやう。

光輝、屈託なく笑う。  
透子、その笑い声にほだされて、

透子 どこ行く？ 何食べたい？  
光輝 ファミレスとか？  
透子 ファミレスは嫌や。  
光輝 どこでもいいです。  
透子 もう。今どこ？  
光輝 駅。  
透子 迎えに行くわ。  
光輝 やった。



千夏 お母さん。  
昭子 うん？  
千夏 私、なんともないと思う。  
昭子 ん？  
千夏 胸。乳がん。  
昭子 うん。そうやったらええな。  
千夏 なんか自信ある。  
昭子 どういう自信よ。  
千夏 わからんけど。なんか、清々しいから。  
昭子 明後日か、病院。

千夏 まあ、いい結果出たらステーキやな。  
昭子 そうしよ。  
千夏 木村さんの奢りで。  
昭子 そうやった。  
千夏 木村さん、エエ人やね。  
昭子 そう？  
千夏 エエ人過ぎるけど。  
昭子 そうやねん。  
千夏 行きの車。トコちゃんにめっちゃ冷やかされてた。  
昭子 ホンマあの子は。独身同士っていうだけで、ああやってすぐから  
かってくるから。  
千夏 ちよっと電話してえや。  
昭子 何。  
千夏 スターキのこと。キムーラに。  
昭子 なんやの「キムーラ」って。スターキみたい。  
千夏 キムーラのスターキ食べたいって電話して。  
昭子 できるかいな。

千夏、笑う。

昭子 お母さん、買い物んしていくわ。先帰っとく？  
千夏 うん。課題続きやる。  
昭子 小説。  
千夏 ていうほどのもんちゃうけど。創作実習の課題。  
昭子 どんなん書いてるんか一回読ませてや。  
千夏 絶対嫌。  
昭子 意見言うたるのに。  
千夏 お母さんが何の意見言うん。  
昭子 オモロイとか面白んないとか。  
千夏 いらんし。  
昭子 シヤケ焼くとかでええな。夜。  
千夏 なんでもいい。  
昭子 鍵持ってる？  
千夏 持ってるって。  
昭子 ほんならな。

と、昭子はスーパーへ。(退場)

▽

千夏の課題。原稿を広げる。

千夏　もう私の中から去っていったかと思っていたオスワニが、またこんなタイミングで顔を出す。胸さわぎ。胸が躍る。胸の高鳴り。私の胸は大忙し。他の何かが入ってくる隙間なんか一ミリもないのに、怪しいやつが潜んでる。「シコリ」という名の悪いやつ。シコリワニ。でも。オスワニが追い出してくれるような気もしてる。がんばれ、オスワニ。がんばれ、私。

我に返り、

千夏　あかん。小説やなくなってる。こんなん提出できへんやん。

同日夜。

食事を済ませて店を出た透子と光輝。

光輝 めっちゃオシャレな店でびっくりした。いつつあんなところ行ってるんですか。

透子 大人の女を舐めたらあかんで。

光輝 あの最後のデザート。

透子 桃のタルト。

光輝 はい。

透子 あれ、糖度20度以上の桃だけ使ってるねんて。山梨の専用農家の。

光輝 一緒に入ってたレーズンは？

透子 レーズン？ レーズンは、知らん。

光輝 どこ産ですか？

透子 アメリカとかちやう？

光輝 へえ。俺、レーズン好きやねんなあ。

透子 いや、レーズンは普通のやん。メイン桃やで。

光輝 でも、レーズンも美味かったです。

透子 甲斐ないわ、なんか。

光輝 ほんと、ごちそうさまでした。

透子 はい。よろしゅうおあがり。

光輝、笑う。

透子 何よ。

光輝 ときどき、オカンみたいなこと言うなって思って。

透子 大人の女やからな。

光輝 て言うけど、まだ若いでしょ。

透子 はあ？

光輝 二十、よんとか、ごでしょ？

透子、光輝の頭をくしゃくしゃ撫でる。

光輝 何。

透子 よし、家まで送ってあげよ。

光輝 ええ、もう帰るんですか。

透子 明日仕事なんです。こうちゃんも朝早いんやろ

光輝 もうちよっと話したいです。

透子 はあ？

光輝 ダメですか？  
透子 何それ。

光輝、黙って透子を見る。  
透子、笑って、

透子 子供に誘われるんも悪い気せえへんな。  
光輝 子供とか言うんやめてくださいよ。  
透子 私30やで？  
光輝 はい。  
透子 本気で言うてるん。一回りちやうねんで。  
光輝 何ですか一回りって。  
透子 干支や。

透子、笑って、

透子 十二支言える？  
光輝 じゅうにし。

透子 よし。十二支言えたらもうちよつと付き合っ  
てあげよ。はい。(促す)

光輝 ちよつと待って。ヒントください。

透子 ヒントって。

光輝 ヒント。

透子 子、丑、寅、で始まるやつ。

光輝 ああ。年賀状の。

透子 年賀状のって何よ。

光輝 行きます。ね、うし、とら、う、たつ、み… たつ、み…

この先は出てきそうもない。

透子 なんでみんなそこで止まるかな。

光輝 え？

透子 午やんか。

光輝 うま。で？

透子 未、

光輝 ひっじ。で？

透子 「で」ちやう。あかんやん。

光輝 あ。さる、とり、いぬ、い。言えた。

透子 え、なんで。

光輝 言えました。  
透子 なんで急に思い出したん。  
光輝 気合いです。  
透子 ていうか、途中言えてへんし。  
光輝 助け船出してくれたやん。  
透子 助け船ちやうし。  
光輝 透子さんも付き合ってもいいって思ってるからでしょ。  
透子 付き合ってもいいなんか思ってたへんし。  
光輝 あ今の「付き合う」は違いますよ。このあと付き合ってもいいって意味の、  
透子 わかってるわ。

光輝が屈託なく笑うので、

透子 もう、しゃーないな。  
光輝 ホテル行ってもいいですか？  
透子 は？  
光輝 ダメですか？  
透子 あなたな。大人の女を舐めすぎ。  
光輝 ダメですか？  
透子 厚かましい。  
光輝 ダメって言わんやん。  
透子 ダメ。アカンよ。  
光輝 なんだ。  
透子 なんだって。  
光輝 なんでダメなんですか。  
透子 セックスしたら好きになるやんか。  
光輝 それってダメなんですか？  
透子 困る。かも。  
光輝 なんだ。  
透子 恥ずかしいねん。  
光輝 は？  
透子 こうちゃんに気持ちいい顔見られんの恥ずかしいねん。  
光輝 めちやめちやかわいいじゃないですか。  
透子 もう…

突如、蝉の鳴き声に意識がたって、

光輝 めっちゃ蝉鳴いてる。涼し  
いとこ、行きませんか？

透子、ため息をついて。

透子 車。乗って。

光輝 はい。

二人、駐車場へ。(退場)

2日後。火曜日。精密検査の結果が出た日の夕方。下を向いている千夏。そして昭子。何を話せばいいのかわからない。

昭子 お母さん、ちよつと市役所寄つたりしてくるわ。医療保険のこととか聞きたいし。あと銀行行つて…

千夏 うん。

昭子 なんやかんや掛かるな。

と、冗談を混じらせて笑ってみる。千夏が返さないので、

昭子 うそ。…一番エエ治療しよう。

千夏 一番いい治療って？

昭子 一番安心なやつやんか。

千夏、まるで守るように胸に手をやる。

昭子 なんも心配せんでええから。お母さん、ちゃんと考えるから。

千夏、無言。

昭子 あんた、大学の学務課で申請書とかもらつてくるんやろ。

千夏 うん。

昭子 早よ行かんと閉まるで。

千夏 うん。

昭子 ほんなら、お母さんいくで。しっかりし。

千夏の態度を確認しながらも、昭子は去る。(退場)

千夏、透子に電話をかける。

千夏 もしもし。

◇

マスモリ繊維近くの喫茶店で、木村が昭子を待つ。

昭子 すみません、仕事終わりに、こんなところに呼び出して。

木村 いえ。どうされました。

昭子 えっと。木村さん、なんかスーパーのお弁当ばかり食べてはるつて言うてたから、ちよつと作り置きのおかず、どうかなって思つて。



木村 ええ？  
昭子 冷凍できるもんばかりなんで、良かったら。  
木村 え、いいんですか？  
昭子 はい。迷惑やなかったら。  
木村 迷惑なんてそんな。

保冷バッグに入ったおかずを渡す。

昭子 タッパーとか返さんでええんで。百均のやし。  
木村 いや、すみません。こんなにたくさん。いただきます。

昭子、下を向いている。

木村 なんか、お礼。そう、ステーキ。ステーキ食べに行かないと。ね。  
昭子 この前行けなかったし。  
昭子 ああ。

昭子が浮かない様子なので、

木村 どうかされました？  
昭子 ええ。  
木村 どうされました？  
昭子 ちょっと、娘のことで。  
木村 千夏ちゃん。  
昭子 先週、娘の検査に付き添って、会社遅刻した日あったやないですか。  
木村 ええ。武藤さん、元気なかった日。  
昭子 その結果が出て。  
木村 はい。  
昭子 千夏が、乳がんで。  
木村 え。

昭子、言葉が続かない。

木村 おととい、サーカスの日はそんなこと、…そりやそうか。ええっと、どこまで聞いていいかアレですけど、今、どんな状態なんですか？  
昭子 私も、お医者さんの言うてることがあんまり理解できへんくて。初期の乳がんで、しこりの大きさも2センチくらいだから、そんなに心配しなくていいって。

木村 そうですか。

昭子　ただ、まだあの子十代やし、若年の乳がんは、色々慎重に判断しないといけないことがあるみたいで。

木村　ええ。

昭子　でもこの段階で胸の形を再建する手術のこととか、将来的に子供望むのかどうかと言われても、そんなんわからへんから。

木村　この段階でそんなことまで聞かれるんですか？

昭子　いや、聞かれたわけやなくて、そういうこともいずれ判断せなアカンことになるから、よく考えておいてくださいって。

木村　ああ。

昭子、深くため息をつく。

木村　千夏ちゃんはなんて言ってるんですか。

昭子　あの子は、そんなん、なんも決められへんから。どんな治療していかか、私がちゃんと考えたらなアカンくて。気持ちがなかなか、大変です。

木村　そうですか。

昭子　あの子の前で、落ち込むことも出来へんし。

木村　うーん。

昭子　そんなんで、入院もあるし、付いといてあげなアカン日も多くなると思うんです。

木村　そりゃそうですよ。

昭子　お仕事、たびたび穴開けたりすることもあるかもしれないんで、木村さんにお知らせしとかんと、つて思つて。

木村、何度か頷いて、状況の把握に務める時間。

木村　そうですか。

昭子　ええ。

木村　千夏ちゃんが。

昭子　私やったら良かったんですけど。

木村　いや、そういうことじゃないでしょ。

昭子　そうなんですけど。

木村　でも、どっちにしても。大変ですよね。

昭子　私ら親子、今まで健康だけが取り柄やったんですけどね。

と、言っても仕方ないことを言つて、すぐに行き詰まる。

木村　そんなときに、なんか、すみません。(もらったおかずを意識)

昭子　いえ、どっちにしても、これからのこと思つたら、うちも作

り置きしとかんとアカンから。あと、料理してるときは、余計なこと考え  
んでいいんで。

木村、このまま脱線させるか、話を戻すか少し考えて、後者を選択し、

木村 社長には？

昭子 まだ、

木村 もう少し様子見てから伝えますか？

昭子 そうですね。

木村 僕で止めておいた方がいいですよね。

昭子 ありがとうございます。トコちゃんにだけ、言うかもしれません。

木村 それは、ええ。

昭子 ハア。なんでこんなことに。

木村 とにかく。僕に協力できることあったら何でもするんで。遠慮なく  
頼ってください。

昭子、ハンカチで目を押さえる。

昭子 すみません。先出ますね。

木村 はい。

(昭子、退場。やがて、木村も退場)

駅前のパン屋で透子を待つ千夏。  
透子が現れる。電話である程度のことは告げられている。

透子 千夏ちゃん。

千夏 トコちゃん。

透子 どうしたんよ。

千夏 ごめん、電話で突然。

透子 それはええねんけど。大丈夫？

千夏 大丈夫かは、わからん。

透子 なんで千夏ちゃんが。

千夏 ……。

透子 ごめん。前ここで会ったとき言うてた乳がん検診？

千夏 そのあと、精密検査して、その結果が今日出て。

透子 どうなん体調。

千夏 別に、今はなんともないねんけど。

透子 私も、千夏ちゃんに電話もらってから付け焼き刃で調べただけやから、的確なアドバイスできるか分からへんねんけど。

千夏 ちゃうんです。誰かと一緒にいたかっただけかもしらん。お母さん

じゃない人の。

透子 そっか。そうやんな。

千夏 お母さんずるいから。

透子、それに返す言葉がない。

透子 なあ、色々聞いても大丈夫？ あんまり質問責めにしたくはないけど。

千夏 はい。

透子 今日、お医者さんにどこまで言われたん？

千夏 ガンは、早く見つかったから、しこりも小さいし、リンパとかの転移も考えにくいつて。

透子 良かったやん。

千夏 まず、手術して、ガンを取って、それを調べてから治療法を決めていくらしいです。

透子 そうやんな。取って終わりちゃうんやんな。

千夏 なんか難しいこと聞かれてて。

透子 何。

千夏 今すぐ決めたアカンわけちゃうけど、将来的に、治療と、出産のタイミングも考えたりせなアカンねんて。

透子 え？

千夏 彼氏もおったことないのに、どうやって考えたらええん。

透子 それは今すぐやなくてもええんやろ。

千夏 でも、手術終わってからの、抗がん剤とか、放射線治療とかするときには、ある程度決めとかなんとアカンみたい。

透子 そうなんや。

千夏 あと、胸のこと。

透子 うん。

千夏 温存手術ってわかる？

透子 切除せずに、胸の形残してくれるんやろ？ それはそうした方がええんちやうん。

千夏 ただ、胸の形、変になるかもしらんねん。

透子 でも、書いてあったで。再建手術も今進歩してるって。

「再建」という熟語に違和感を抱いて、小さくリフレインする。

千夏 再建。

透子 うん。

千夏 でも、切除した方が再発のリスクが減るからって。

透子 そうかもしらんけど、まだ若いんやし。

千夏 若いから、再発の可能性も高いんやって。

透子 うーん。

千夏 全部、取った方がええって：

透子 誰が。

千夏 お母さん。

透子 アッコさんが？

千夏 一番いい治療するって。私が決めたるって。そういう意味やと思う。  
(判断) 難しいな。

千夏 胸なんか残してどうすんのって。

透子 え？

千夏 て言われた気がした。ブラジャー、買うてくれへんかったときとおんなじ。

透子 千夏ちゃん。

千夏 女性として、この先の人生のこと、よく相談しなさいって言われてんけど、そんな話、お母さんとできへんから。

透子 そんなことないよ。

千夏 できへんよ。真面目な話なんかしたことないし。恋愛の話とかもしたことはないし。家、狭いし。二人しかおらんし。

透子 ……。

千夏 だから、トコちゃん。  
透子 うん。私が聞いてあげるから。

千夏、言葉にはならないが、感謝の意。

千夏 この前喋った、中2のときの話。  
透子 うん。

千夏 あのと時から私の胸って、ずっとストレスに晒されてきたのかな。  
それでガンなんかできたのかな。

透子 そんなんちゃうよ。

千夏 自意識が強すぎて、こじらせたのかな。

透子 なんなんそれ。

千夏 お母さんのせいや。

透子 千夏ちゃん。

千夏 私の初恋。

透子 え。

千夏 幼稚園のときの初恋の相手。こうちゃんなんです。

透子 ああ。

千夏 中2のときに胸のことからかったんもこうちゃんなんです。

透子 そうなんや。

千夏 私、今もずっと、こうちゃんのが好きなんやと思う。

透子 ……。

千夏 私、トコちゃんに会えて、ホンマに良かった。

透子 え。

千夏 トコちゃんおらんかったら芸大の存在なんか知らんままやったし、

普通に短大の文学部行つてたと思う。

透子 うん。

千夏 おととい、サーカスの帰りにこうちゃんと二人で帰って、いろんな話できて、めっちゃ楽しかったんです。小っさかったときとは違って、将来の話とかできて、なんか夢みたいな時間やった。

千夏、照れ隠しのようにして、

千夏 その二日後にこれやから。

透子 ……。

千夏 あー、こうちゃんカッコ良くなり過ぎやわ。絶対私なんか相手にしてもらわれへん。

透子 ……。

千夏 ガンやし。

透子 そういうこと言うたらアカン。

千夏 トコちゃん、私、ちゃんと恋愛できるんかな。

透子 できるよ。

千夏 できるんかな。

透子 できるって。大丈夫やから。

千夏 あー、手術嫌や。

透子、千夏を慰める。

千夏 アカン。ちよつと鼻嚙んでくる。

(千夏、退場)

16場の後。透子が光輝を呼び出した。

光輝 透子さん。

透子 ごめん、こうちゃん。

光輝 いきなりごめんて。

透子 全部なかったことにしてもらわれへんかな。

光輝 何が。

透子 全部忘れてもらっていいかな。

光輝 何言ってるん。

透子 もう会われへんし、連絡もできへんから。

光輝 なんなん。全然意味わからへん。

透子 私のこと、絶対誰にも喋ったらアカンで。

光輝 はあ？ なんなんですか。何があったん。

透子、苦し紛れの嘘をつく。

透子 こうちゃん未成年やろ。私、大人やろ。

光輝 なんですか。

透子 犯罪やから。私、捕まるから。

光輝 何言うてるん。

透子 ホンマやから。だから、おとといのこと、誰にも言わんといて。

光輝 言わへんけど、なんなんですか。

透子 お願いやから。

光輝 説明してくださいよ。

透子 説明することなんかなんもないから。

光輝、気圧されて黙る。

透子 ごめん。

光輝 そういうやり方なん。「大人の女」って。

透子 ……。

光輝 そうやって弄(もてあそ)ぶん。

透子 こうちゃんかて、ノリやったやんか。

光輝 違う。

透子 不用意やったと思う。ごめん。

透子、先にこの場を去る。(退場)

光輝、透子の後ろ姿を見つめる。(やがて退場)





武藤家。

16場と同日。午後7時過ぎ。千夏が帰宅する。  
昭子がキッチンから現れる。

昭子 おかえり。  
千夏 たいま。  
昭子 どう。  
千夏 何が。  
昭子 何がつて。…体。

千夏、黙って座る。

昭子 お腹は。  
千夏 空いてない。  
昭子 空いてないことないやろ。なんか食べたん。  
千夏 食べてない。  
昭子 アカンやんか。あんたお昼も食べてへんのに。  
千夏 いらんの。  
昭子 なんか食べなアカンで。  
千夏 今はいらんの。

昭子が次の言葉を探しているところに、

千夏 トコちゃんに会ってきた。  
昭子 トコちゃん。そうやったん。  
千夏 トコちゃんに色々話聞いてもらった。  
昭子 トコちゃん、なんて？  
千夏 なんでも話聞いてくれるつて。大丈夫やからつて。  
昭子 ホンマ、優しい子やな。  
千夏 ちよつとだけ、落ち着いた。  
昭子 それやったたら良かった。  
千夏 うん。

昭子、少しプレッシャーから解放された。

昭子 お好み焼き焼いといたから。お腹空いたらチンして食べ。  
千夏 ええ、なんで焼くん。食べる時に焼いてえや。  
昭子 冷凍しとこ思つて、いっぺんに焼いたんやんか。

千夏 冷凍？ お好み焼き冷凍？  
昭子 作り置き、あったら便利やろ。  
千夏 そんな美味しくないやん。  
昭子 そしたら今食べないやん。  
千夏 今は食べたくない。  
昭子 勝手なことばかり言うて。

行き詰まる。

昭子、改まって、

昭子 お母さんもな、木村さんに話してん。  
千夏 え。なんで。

昭子 仕事抜けたりする人も増えるやろし、上司やから前もって言うとか  
なアカンやろ。

千夏 知られたくなかった。

昭子 しゃーないやんか。

千夏、不貞腐れた様。

昭子 お母さんかて、相談できる人おらんねんやん。

千夏 トコちゃんがおるやん。

昭子 トコちゃんもそうやけど。トコちゃん、年下やし。

千夏 そんな関係ないやんか。

昭子 お母さんと千夏、二人してそんなん、トコちゃんも困るやろ。木村  
さん、何でも頼ってくれていいって言うてくれて、お母さんもちよっと  
ホツとしたんやんか。

千夏 そんなん、ただ木村さんと話したいだけやん。

昭子 何を言うてんの。

千夏 だってそうやん。

昭子 あんたのこと、心配してくれてたで。

千夏 いらんし。心配とか。

昭子 なんやのいらんて。

千夏 なんでも頼っていいんやったら、治療費とか、そういう現実的なや  
つで助けてもらった方がええやん。

昭子 なんでそんな言い方するんよ。

千夏 なんで今木村さんなんよ。

昭子 大事な人やからやんか。

千夏 は？

昭子 あんたかて、これから、た くさんお世話になるかもわからん

ねんで。

千夏 何それ。全然意味わからへんねんけど。

昭子 今それはええの。

千夏 ああ、もう。

昭子 何をイライラしてんねんな。

千夏 気持ち悪いねん。

明子 何がよ。

千夏 嫌やねん。

昭子 何を言うてるん。

千夏 もうあっち行って。

昭子 あんたが自分の部屋行ったらええやろ。

昭子、凶らずも大きな声を出してしまい、場が膠着する。

昭子 お好み焼き。食べるんやったら勝手に食べや。お母さん知らんで。

と、昭子、言い捨てた言葉に後悔を残すが、キッチンへ。(退場)  
時間経過。

千夏の課題。

千夏 私の中にいる、一番大きくて、一番厄介な、オカンワニ。オカンワニは、なんにもわかってない。私のこと、なんにも。私の胸、オカンワニに食いちぎられるかしらん。

翌日正午頃。マスモリ繊維の休憩所。

透子がパンを手にしたまま、少しぼんやりしている。  
そこに昭子が現れて。

昭子 トコちゃん。

透子 アッコさん。

昭子 ありがとうな、トコちゃん。昨日。

透子 私は、何も。

昭子 ごめんな、私から言う前に、直接千夏が。

透子、首を横に振る。

昭子 でも、おかげで落ち着いたって言うてた。

透子 何の力にもなれてないです。ホンマ、悔しいくらい。

昭子 そんなことないよ。

透子 千夏ちゃん、大丈夫そうですか。

昭子 どうやる。家人中、二人やから。あの子も私もすぐイライラして。

アカンねん。

透子 そうですか。やけど、一回ちゃんと親子で話しせんと。

昭子 そうやねんけどな。

透子 色々、決めとかなアカンこと、あるんでしょ。

昭子 聞いた？

透子 だいたいのは。

昭子 そう。

透子 すみません。私は、胸は残した方がいいと思います。

昭子 え。

透子 千夏ちゃんの気持ち、聞きました？

昭子 あの子に聞いたって、無理やんか。まだ大学生やで。

透子 もう子供ちゃいますよ。千夏ちゃん、自分の言葉で小説書いてるんですから。

そこに、木村がやってきて。

木村 武藤さん。

昭子 ああ、木村さん。

透子は、木村が千夏の病気のことを知っているのか伺うような態度。

昭子 昨日はありがとうございました。  
木村 いえ。

昭子 (透子に) 木村さんには、昨日。  
透子 そうですか。

木村 (あの後) 大丈夫でしたか？

昭子 まあ、手術の後のこと考えると、なかなか。  
木村 ですよね。

昭子 でも、木村さんに話聞いてもらって、私もちよつと安心しました。

木村 それは、良かったです。

昭子 ええ。

木村 ただ、ですね。

昭子 ？

木村 その、昨日の喫茶店で二人で喋ってるところをダニカさんと野村さんに見られてたみたいで。

昭子 え、全然気づかんかった。

木村 武藤さん、目腫らして出て行った後、二人、わざわざ喫茶店入って来て、僕の前に座って。

昭子 もうあの人は。

木村 なんか、二人、からかうようなこと言ってくるもんだから。

透子 悪趣味。

木村 僕も、千夏ちゃんのこと言えないし、誤魔化すのが大変でしたよ。

昭子 すみません。

透子 ほつといたらいいんですよ、そんなの。

木村 ええ。まあ、でも、相手が武藤さんで良かったです。

昭子 え？

木村 だって、武藤さんですもん。誤解されようがないじゃないですか。

木村は場を軽くしようと、ジョークのつもりで発した。

昭子は木村の言葉をどう捉えたらよいか困惑し、

昭子 ちよつとそれどういう意味ですか。

木村 ははは。

透子、昭子の曇った表情から敏感に傷ついていることを察知し、

透子 木村さんそれ酷いんじゃないですか？

透子が真剣に非難するのに覆いかぶせて、昭子は冗談にしてしまうことを選び、努めて明るく、

昭子 ホンマですよ。酷いわ。  
木村 いやあ、ははは。

透子は昭子を心配する。  
木村は昭子の心情には気づかないまま。

木村 でも本当。大変だとは思うんですけど。どんなときも、武藤さんらしく、笑顔で乗り越えていきましよう。

昭子、耐えられなくなり、顔を背けて、

昭子 ちよつと言うて来たろかな。

木村 え。

昭子 こっちの気も知らんと。

木村 まあ、それは仕方ないって言うか。

昭子 ちよつとすみません。

と、昭子は木村に顔を見られない様にその場を去った。(退場)

木村 あれ、武藤さん。え、本当に言いに行く気じゃないですよね。

透子 木村さん。

木村 はい。

透子、言いたいことはあったが、ふと我に返り。

透子 くそ。他人(ひと)のこと言われへん。

木村 え？

透子 上手くいかないときって、とことんですよね。

木村 ああ。ええ。

透子 ホンマ…。(ため息をついて)すみません。他の人に見られたらアレなんで、行きます。

木村 え？

透子 冗談です。

木村 ああ。はは。

透子 すみません。

透子、ニット工場の方へ。(退場)

木村、所在なく。

木村

あれ。

(やがて退場)



駅のベンチ。光輝がいる。  
千夏が通りかかる。

千夏 こうちゃん。  
光輝 おう。

千夏の表情が（無自覚に）複雑なのを見て、

光輝 どうしたん。  
千夏 何が。  
光輝 なんかも暗いで。  
千夏 いつもやし。こうちゃんこそどうしたん。そんなとこ座って。  
光輝 誰か来るん待ってた。  
千夏 え？

光輝が何も言わないので、

千夏 誰かって誰よ。  
光輝 わからんけど。  
千夏 なんなんそれ。

光輝、返さない。

千夏 横、座っていい？

光輝、頷く。  
千夏、座る。

千夏 今日稽古ないん？  
光輝 あるよ。  
千夏 行かんていいん？  
光輝 行かなあかん？  
千夏 え？  
光輝 自分でもあんまりわかってへんねんけど。こういう体験を味わって  
るっていうか、ちよつと酔ってみようとしてるんかもしらん。

千夏 ……。なんか、それ、面白い。  
光輝 面白い、か。  
千夏 表現が。

光輝 使ってええで。千夏の小説に。  
千夏 それは遠慮しとくわ。

二人、小さく笑う。

千夏 落ち込んでるこうちゃんもおるねんな。  
光輝 おるよ。  
千夏 意外。  
光輝 千夏もなんか元気ないやん。  
千夏 私は万年沈んでるから。特技「自己嫌悪」やから。  
光輝 それなんかすごいな。  
千夏 趣味は「後悔」と「身悶え」。  
光輝 おお。  
千夏 長所は「長所がないところ」。  
光輝 それ、就活のエントリーシートに書いてみてえや。  
千夏 志望動機欄にはいきなり反省文書く。

光輝、笑う。

千夏 そんなネガティブガールで良かったら話聞くで？  
光輝 ネガティブガール。嫌やな。  
千夏 私より不幸な人おらんし。楽になるかも。  
光輝 俺の方が不幸やし。  
千夏 そこは絶対私やわ。  
光輝 不幸自慢大会でもやる？  
千夏 やる？

二人、笑って、

千夏 どうする？ どこか入る？  
光輝 うーん。稽古行こつかな。  
千夏 誰か待ってたんちやうん。  
光輝 やめた。  
千夏 そうなん。  
光輝 ありがとう。なんか元気出た。  
千夏 それやったら良かったけど。

光輝、立ち上がって、

光輝 振られてん。

千夏 え？

光輝 それだけ。しょーもないやろ。

千夏 ……。

光輝 大人の女は難しいわ。

千夏 大人の女。

光輝 なんか俺、誰かのこと好きになろうとしても、相手がちやんと恋愛対象として見てくれへんねん。

千夏 そうなん。

光輝 本気やのに、伝わらへん。

千夏 ふーん。

光輝 「ふーん」て。ま、わからんか。千夏は恋愛で悩んだりしなさそうやもんな。

千夏 なんですよ。

光輝 そういう風に見えへんもん。昔から。

千夏 そういう風に見せてへんだけやもん。

光輝 おお、意外。

千夏 私も。…失恋してんで。

光輝 そうなん。

千夏、黙る。

光輝 なんか長なりそう。俺、稽古やし。またゆっくり残念会でもしよ。

千夏 ……

光輝 じゃあ。

光輝、去る。(退場)

千夏の課題。

千夏 オスワニに、めっちゃくちゃに胸を掻き乱された。そんなに荒っぽくされたら、ガンが、心臓にまで転移するやんか。

ずっと触れたらアカンと思ってた胸。オスワニにからかわれ、シコリワニに占領され、オカンワニに無視された、胸。

この胸は、誰にも触られることなく、なくなってしまうんかな。胸を触られるって、どんな感じなんかな。

夜。

昭子が千夏の課題を見つけて読んでいる。  
帰宅する千夏。原稿を手にしている昭子を見て、

千夏 何してるん。

昭子 おかえり。

千夏 ちよつと何してるんよ。

昭子 部屋、片付けたろ思っつて、

千夏 なんて読んでるんよ。

昭子 机の上、あつたから。

千夏 机触らんといつてつて言うてるやんか。

と、原稿を奪う。

千夏 読んでん。

昭子 読んでへんよ。

千夏 絶対読んでる。

昭子 千夏。

千夏 もう嫌や。

昭子 ちよつと話していい。

千夏、返さない。

昭子 治療のこと。

千夏 嫌。

昭子 嫌とかちやうやろ。

千夏 お母さんとなんか話しできへん。

昭子 ほんならトコちゃんに来てもらうか？

千夏 嫌。

昭子 千夏。お願い。ちゃんと話そ。

千夏 どうでもいいねん。

昭子 どうでもいいことないやろ。先々のこと考えとかなアカンやんか。

千夏 そんな話、今更できへんから。

昭子 今せんと、いつすんの。

千夏 結婚もせえへんし、子供も産まへん。どうでもいい。

千夏、黙る。

昭子、状況を変えようとして、

昭子 そしたら、ごはん、食べながら喋る？

千夏 なんですすぐごはん。

昭子 ごはん大事やんか。

千夏 いらん。

昭子 肉買うてきたのに。ステーキ焼いたろ思っ

千夏 は？

昭子 食べたい言うてたやん。

千夏、木村のことを思うが、口にはしない。

昭子が自ら口火を切る。

昭子 なんか、ステーキご馳走してもらお思っただけど、ダメになっ

やん。

千夏、まだ口を開かない。

昭子 200円のお弁当とか食べてる言うてたから、色々作って持っ

行ってあげてんけどな。お好み焼きも、ホンマは焼きたてがええけど、大  
阪の家庭の味みたいなん、教えたる思っ

千夏 何の話よ。

昭子 ステーキ、ゲットできんかったわ。

千夏 ゲットできんかったんは、ステーキやなくて、キムラヤ。

昭子 ……

千夏 娘がこんなときに何してるんよ、ホンマ。

昭子 ホンマやで。

千夏 みんなして。

昭子 え。

千夏 なんもない。

昭子 お母さん、離婚してから、はじめてかもしれらん。男の人意識したん。

千夏 そんな話聞きたないし。

昭子 そんな話もせんと、あんたの話も聞かれへんやん。

千夏 私はなんもないよ。

昭子 もう20年以上、恋愛なんかしたことなかった。あんたのこと育て  
るのに必死やっ

千夏 私のせい。

昭子 あんたのせいや。

千夏 何それ。

昭子 うそやけど。でも、うそや

ない部分もある。誰かのこと好き

になったりしてる場合やなかった。あんたには、私みたいな目に遭わせたくなかったから。

千夏 なんなん。後悔してるん。自分の人生。

昭子 してへん。前の旦那がいたから千夏ができて、千夏がいたから、一生懸命仕事もできたしな。

千夏 ……

昭子 千夏を大学入れて、ホツとしたところに、フラツと現れたんが木村さんやつて。

千夏 一目惚れ。

昭子 いきなりデート誘ってくるし、話も合うし、独身やし、なんか勘違いしてもうたわ。

千夏 いい歳して舞い上がって。

昭子 ホンマにな。

千夏 なんで振られたん。

昭子 振られるとか、そういう話になる前に終わってん。

千夏 私が病気になったから？

昭子 ちゃうよ。ただ単にお友達やったってこと。

千夏 ふーん。

昭子 腹立つねんで。私と二人でいるとこ、他の社員に見られても誤解されようがないとか言うねんで。

千夏 まあそれはそうやと思う。

昭子 なんでよ。

千夏 だって、お母さんやもん。

昭子 私かて、お母さんとちゃうときもあんねやで。

千夏、昭子の表情を改めて見る。

昭子 あーあ。老後にやっどご褒美もらえるか思ったんやけどな。木村さんと一緒やったら楽しかったやろうな、とか言うたりして。

千夏 それは、まだチャンスあるんちゃうん。

昭子 ないない。もうこっちが冷めたわ。

と、笑って見せる。

千夏 でも。ええやんか。お母さんは人生で一回は結婚してるんやから。

昭子 なんもええことあるかいな。

千夏 ええやんか。恋愛して、結婚したんやろ。

昭子 そのときはそうやけど。もう20年も前の話。

千夏 私はたぶん、結婚することもないし。恋愛すら…やん。

昭子 そんなことないって。

千夏 そうやって。胸かて、どうなるかわからんやん。

昭子 胸なんか関係ない。

千夏 関係ないかしらんけど、関係あるかしらんやん。わからんやん。

昭子 ……。

千夏 私も、これから、誰かのこと好きになって、恋愛するかしらんねんで。

昭子 ……。

千夏 私、おっぱい全部取らなアカン？

昭子が千夏を後ろから抱きしめる。

千夏 ちよう(ちよつと)。

しばらく黙る。

千夏 重い。

昭子 重い。

千夏 やめてや。

昭子 やめへん。

千夏、母の体温を感じる。

昭子 胸触ったるか？

千夏 は。

昭子、言うが早いか、千夏の胸を揉むように触る。

昭子 こんなんやで。

千夏 やめてや。

昭子 痛かった？

千夏 くすぐりたい。

昭子 こうや。(更に触る)

千夏 ちよつと。恥ずかしいから。

昭子、そのあとは千夏の胸に手を添えるようにだけして、

昭子 大きくなってたんやな。ごめんな。

千夏 知ってたくせに。

昭子 　いつの間に、や。

しばしあって、昭子、抱擁を解いて、

昭子 　まだ十年も二十年も。ちやう。もっと、ずっと、千夏は生きなアカンねんで。…せやから、

千夏 　ステーキ食べよ。

昭子 　え。

千夏 　せやから。お肉焼いて。ステーキ食べながら、話そ。

昭子、頷く。

昭子 　そやな。一緒に食べよ。

昭子、立ち上がって、

昭子 　よし。

と、キッチンへ。(退場)

千夏、昭子の背中を目で追い、自分の胸にそっと触れる。  
やがて、原稿に向かい、ペンを走らせる。

了